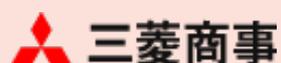




こども食堂の”価値”を「見える化」する
さくらプロジェクト
(2019 - 2022年度)
報告書

認定 NPO 法人
全国こども食堂支援センター・むすびえ
(支援:三菱商事株式会社)

共同実施
株式会社ブルー・マーブル・ジャパン



目次

1 さくらプロジェクトの目的	03
2 さくらプロジェクトの歩み	04
2-1 こども食堂の価値の仮説の整理	04
2-2 評価アプローチの検討	08
2-3 3年間のあゆみ	10
2-4 プロジェクト実施体制	11
2-5 プロジェクトへの協力団体	12
3 地域ネットワーク団体での評価の取り組み	14
3-1 滋賀県におけるセオリー構築	14
3-2 諏訪圏域におけるセオリー構築	19
3-3 地域ネットワーク団体(滋賀県、諏訪圏域)によるセオリー構築でわかったこと、 学んだこと	22
4 こども食堂の価値を捉える評価アプローチ	23
4-1 こども食堂のセオリー構築の限界	23
4-2 MSC ツールキットの開発	25
4-3 さくらの花びらサポートキットの開発	26
5 こども食堂の価値を捉える実践結果と考察	28
5-1 MSC 実践による評価結果と考察	28
5-2 サポートキットによる評価実践の結果と考察	33
5-3 全国調査の結果と考察	41
6 価値研究会	45
価値研究会の議論のまとめ	47
7 まとめ・考察	50
8 今後に向けて ～こども食堂の価値の扱いをさらに発展させるために～	52
8-1 ボトムアップ型の価値の創出、収集、整理の仕組みづくりに向けて	52
8-2 MSCの発展的な展開について	52
8-3 サポートキットの発展的な展開について	54
9 付属資料	57

第1,2章はプロジェクト全体の概論であり、第3-6章は詳論という位置付けである。

1 さくらプロジェクトの目的

特定非営利活動法人全国こども食堂支援センター・むすびえ（以下、むすびえ）では、「こども食堂が生み出す価値」を可視化して、社会に適切に伝えていくことで、こども食堂の取り組みをさらに広げていくことを目指している。そのためにこども食堂が持つ多面的な社会的価値、効果を示すための「さくらプロジェクト」を2019年から実施しており、2022年度で一旦終了した（三菱商事による支援）。プロジェクトは、むすびえが株式会社ブルー・マーブル・ジャパン（以下、BMJ。ただし2019年度のみ一般財団法人CSOネットワーク）との共同実施体制を築いて（契約上は業務委託）、実施してきた。2年度（2020年度）目以降、全国の地域ネットワーク団体[※]の協力を得て、評価モデルを構築し、こども食堂が地域にもたらす価値や効果を見るための指標の設定やデータ収集を行ってきた。

さくらプロジェクトは、こども食堂の複合的な価値を捉え、可視化することでその意義や効果の普及を行うことを目的とした。こども食堂は、全国的な関心の高まりの中で、子どもの貧困対策の一環の取り組みとして捉えられがちである。しかし実際は、地域の子どものからお年寄りまでが集うその多くが全世代型の「多世代交流拠点」として機能し、包括的・複合的な価値を地域・社会に提供しており、その効果も多岐にわたると考えられる。このような潜在力をもつこども食堂の社会的な価値の可視化は、こども食堂の普及啓発に資するとともに、日本の多様な社会課題解決の指針を示すことになりえる。これを達成するために、こども食堂の複合的な価値を可視化、言語化し、これを関係者で共有することが肝要と考えたのである。そして、価値を可視化、言語化するために、評価モデルの構築と実施をプロジェクトの主眼とし、異なる評価アプローチへの専門性をもつBMJがさくらプロジェクトの共同実施主体となった。

このような問題意識から、むすびえは、図1に示すように、あらかじめこども食堂の効果を、1)地域活性化、2)子どもの貧困対策、3)孤食対応、4)子育て支援・虐待予防、5)高齢者の健康づくりの5つのバリュー（価値）として集約し、中央に「多世代交流」を配置した「さくらの花びらモデル」を構想した。本プロジェクトを「さくらプロジェクト」と呼ぶゆえんである。

プロジェクト開始時に、むすびえは、「2022年までに全中学校区（約10,000箇所）にこども食堂を設置すること、そして2025年までに全小学校区（約20,000箇所）に子ども食堂を設置することを目標とする」こと、さらにその手段として「自治体のこども食堂の設置数のランキングを発行すること」や「保育園・ファミリーレストランなどの業界団体との連携を進めること」などのビジョンを示した。

※1 地域ネットワーク団体：対象地域のこども食堂同士の交流や情報の連携（ネットワーク形成）を促進する団体で、物資仲介などの支援を行なっている。

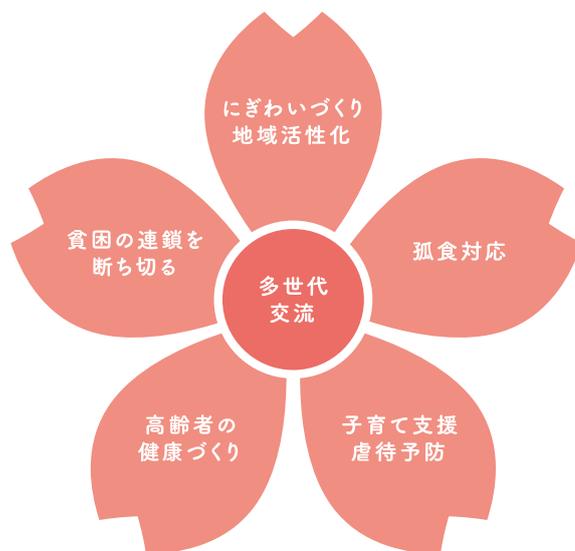


図1. こども食堂の5つのバリュー（価値）

2 さくらプロジェクトの歩み

2-1 こども食堂の価値の仮説の整理

上記のように、むすびえは、こども食堂の効果を5つのバリューとして集約し、中央に「多世代交流」を配置した「さくらの花びらモデル」を作成した。

[1] 5つのバリューの再整理

2019年度のさくらプロジェクトの調査では、こども食堂運営者へのヒアリングや評価ワークショップなどを通じて、こども食堂の5つのバリューの再整理を行った。当初さくらプロジェクトの中心的な価値として置いていたものは、図2の左側に示すように「多世代交流」であったが、調査結果を踏まえると、下図右側に示す「居場所・拠点としてのこども食堂」の機能を中心に置いた方が、概念的整理が進むと考えられ、そのような再整理が提示された。

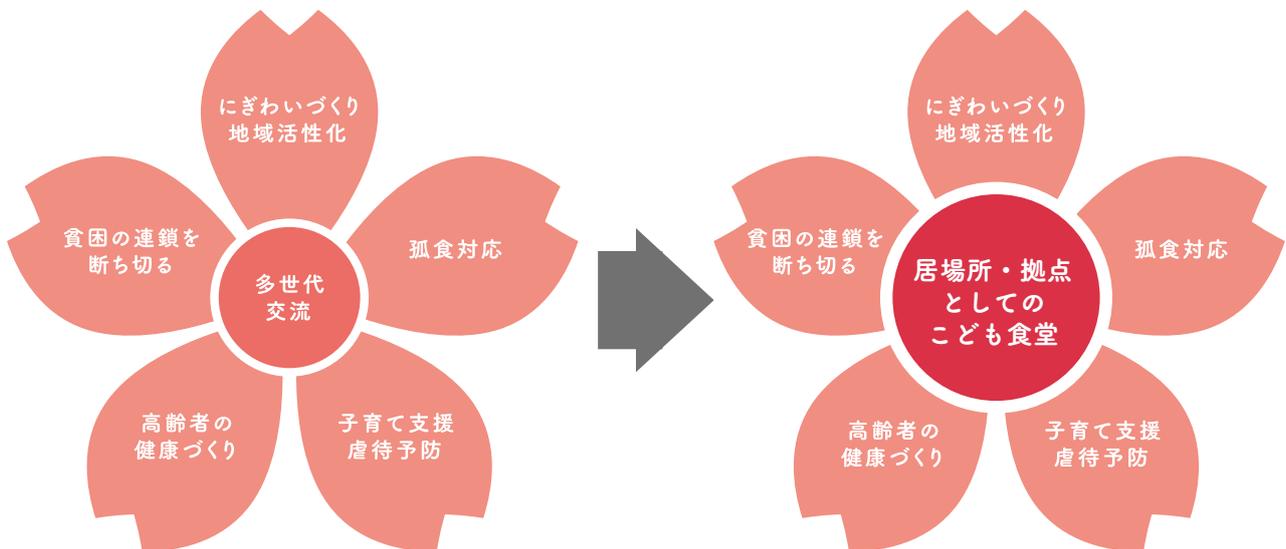


図2 こども食堂のコアバリューの再整理

[2] 居場所・拠点としてのこども食堂の深掘りの必要性

さくらの5枚の花びら（あるいはその変形）として位置付けられるバリューをこども食堂運営の結果として現れる中長期的な成果、すなわちアウトカムとして特定し、実際にそのようなアウトカムが生じているのか、効果検証を進めることは重要である。しかし、それと同時に、中心に「居場所・拠点としてのこども食堂」を置き直してみた上で、そこから派生するこども食堂の役割について深掘りし、そこから見えることを丁寧に拾っていくことにも意味があると考えられた。こども食堂運営者からは、にぎわいづくり、地域活性化など、地域の中の居場所としてのこども食堂の価値がたくさんあがっており、かつ食堂運営する中で運営者が地域の中で困っている子どもや大人の存在に気づく場面があるという声も聞かれた。このような地域の中の居場所という機能と特定の誰かの困りごとという社会的なニーズを5枚の花びらの中に配置するにしても、それらの概念整理や体系化、言語化が不十分のままになっていた。

2019年度調査結果のまとめでは、この中心的価値を「誰にとっての」「いかなる」居場所・拠点であるかに注目しながら、その後の展開として、こども食堂の価値を運営者や関係者が実感した場面を捉える個別エピソードを集める方法を提案していた。これは、こども食堂運営者、評価者の主観的なインパクトの深度を大切にするという方法である。そして、それらをアウトカムのタイプ別に種類分けをおこなうという方法である。評価手法としては、MSC (Most Significant Change)やOutcome Harvestingなどの採用が考えられた。これらは後述する発展的評価でも紹介される評価手法であり、取り組みにおいて生じた効果をあらかじめ設定した指標によって捉える以外の方法で把握すべき事象の評価に向いているとされている。

[3] 評価における2つのアプローチ

「居場所・拠点としてのこども食堂」という中心的価値と5つのバリューの関係性に関する考察を深めるには、図3に示すように2通りのアプローチが考えられた。(i)は、特定の社会課題解決に資するためのこども食堂という考え方であり、(ii)は、複数の社会課題解決を可能にする装置としてこども食堂を捉えるアプローチである。

- (i)中心は5つの花びら（あるいはその変形）を達成するための手段 = 道具的・機能的価値 (instrumental value)
(ii)中心には内在的・本質的価値 (intrinsic value) があり、5つの花びらや類似の課題解決を可能にする要件 (enabler)

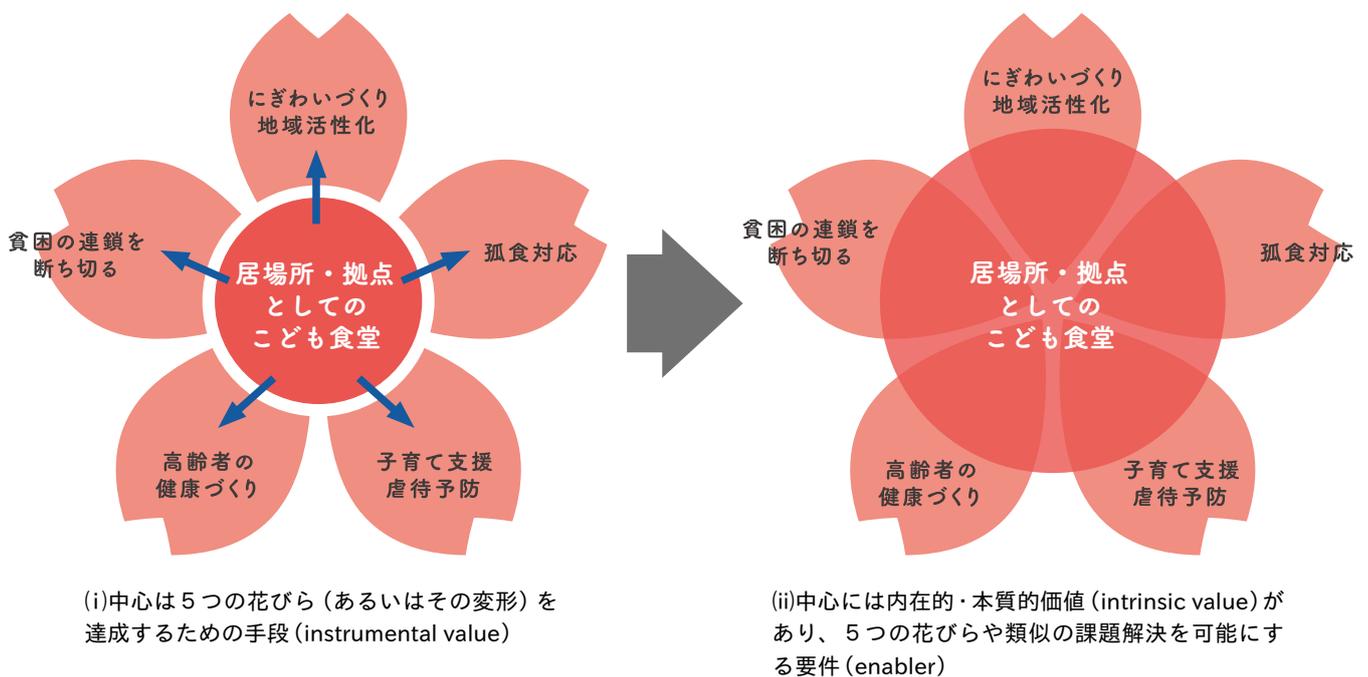


図3 道具的価値と内在的価値

5つの花びらで表される課題のうち、「貧困の連鎖を断ち切る」、「孤食対応」、「子育て支援、虐待予防」は、比較的わかりやすく解決すべき課題として捉えられるが、こども食堂運営上は、あまり意識されていない場合が多い。一方で、「居場所・つながりづくり」など、こども食堂運営において直接意識されているが、具体的な課題解決とのつながりが見えにくく、よってこども食堂の提供価値と捉えにくいものもある。また「居場所・つながりづくり」が、「担い手の広がり、地域での新しい関係性の構築」、「親の身体的・物理的ゆとりができる」、「子どもの自主性が自然と育つ」といった中間項の媒介を経て、「貧困の連鎖を断ち切る」、「子育て支援、虐待予防」などに貢献をするという概念的整理も可能である。これら、5つの花びらと中心の関係性について継続的に考察していくことも、本プロジェクトの狙いの一つとなっていた。(図4)

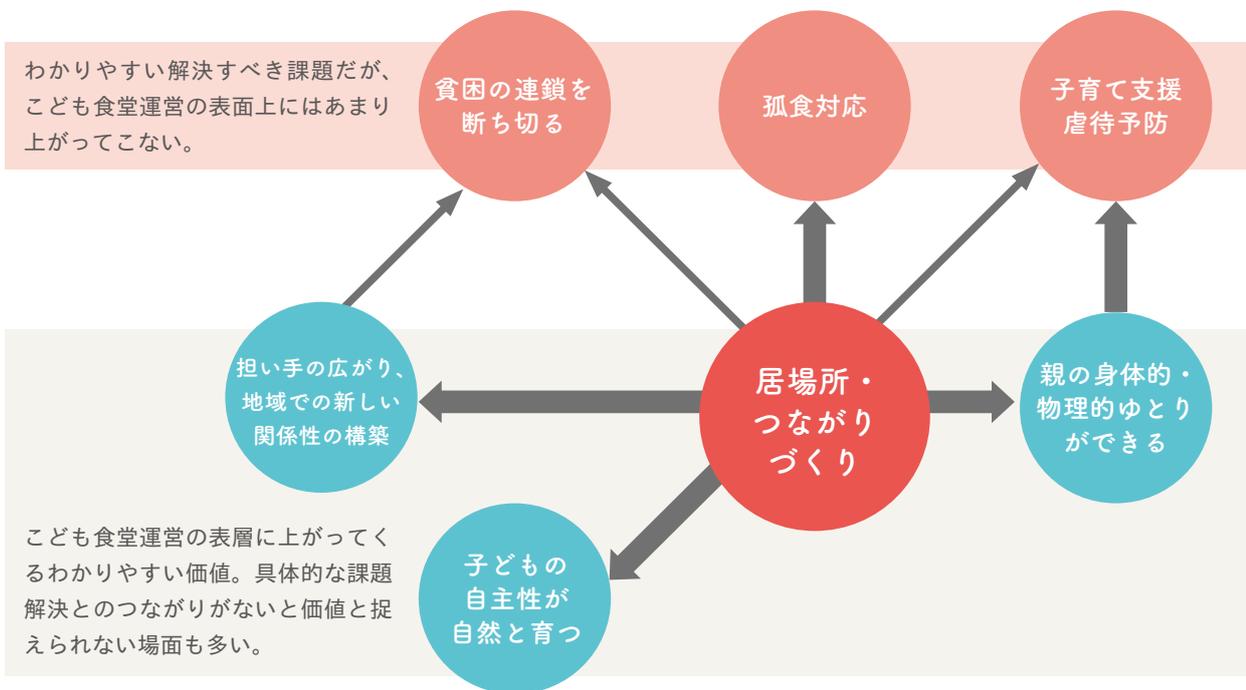


図4 5つのバリュー等の関係性の整理

[4] 5つのバリュー等の関係性の深掘りとさくらの木モデルの整理

2019年度終わりの段階で、上述の(3)-(ii)を発展させることで、5つのバリューを生み出す「地域」と「住民」と「子ども食堂」の関係が整理できると考え、試案的に以下の図5を提示することができた。「地域」という土壌で、そこから養分を吸い上げる「地域住民」がいれば、子ども食堂は、課題意識のある住民が主体になれる「器」となる。この「器」を通して木が育ち、5つのバリューの花が咲き実がなる。そして、実が落ちて土壌が豊かになる。この循環自体が子ども食堂の価値の源泉であるというイメージを図案化したものである。

2020年度以降の本プロジェクトにおいては、この図5のイメージを念頭に、個別の子ども食堂のみならず、これに対する様々な支援を行う地域ネットワーク団体、それらを全国組織として支援するむすびえ含め、総体としての子ども食堂が地域を豊かにするために何ができているかを後付け、将来的に何ができるかを構想していくこともプロジェクトの射程に含まれるようになった。

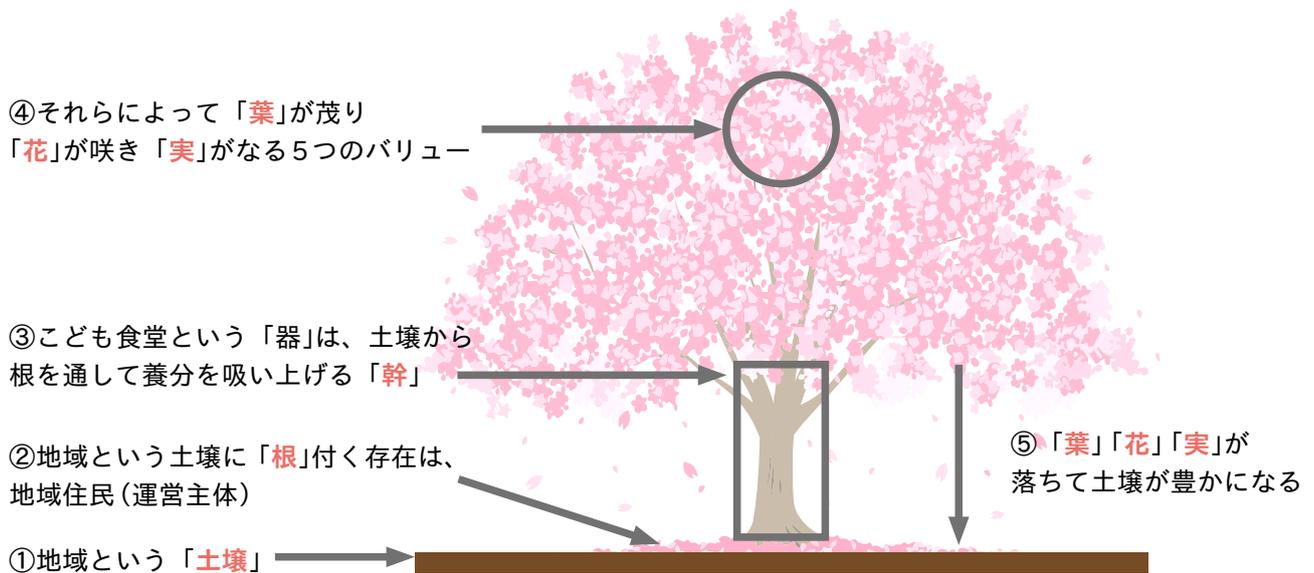


図5 地域の中に根付く子ども食堂を表す「さくらの木モデル」

2-2 評価アプローチの検討

さくらプロジェクトの本筋は評価モデルを構築し、それを個々のこども食堂という現場レベルで実施することだが、これを進める上で大事にしてきたことに、①現場のこども食堂とその活動を支える地域ネットワーク団体が「参加型」で評価システムの構築を行うこと、②こども食堂がもつ性質にあわせて評価アプローチを検討し評価モデルを開発することがある。これらの工夫によって、現場の食堂運営者や地域ネットワーク団体にとって使い勝手の良い実用性を兼ね備えることに腐心した。この2つを可能とするために、イノベーションの評価に用いられる発展的評価（Developmental Evaluation：DE）を基礎に評価の枠組みの構築を行った。発展的評価は、実用重視の評価の系譜にある評価アプローチであり、評価ユーザー（さくらプロジェクトにおいては、こども食堂や地域ネットワーク団体）にとっての実用性を重んじるという特徴がある。

より具体的には、①のために参加型評価の方法論を適切な場面で採用するようにした。2020年度前半は新型コロナウイルス感染症拡大に見舞われて本プロジェクトの実施が困難であったが、2020年度後半からは、現場の状況を踏まえて現場と相談しながら評価手法自体を柔軟に変えてこども食堂の評価モデルの開発を進めていった。一方、②に関しては、こども食堂の活動において明確な目的・ゴールや効果的な活動の実施方法が確立されているわけではなく、運営者がその地域でこども食堂をはじめた背景や地域の実情が異なる。すなわち、こども食堂の活動に共通する客観的なゴールが事前に想定することが困難ということになる。このような理由から、ひとつの評価の枠組みに押し込めて、こども食堂の価値を語ることは強引で無理があると考えた。そのため、いきなり特定少数の関係者とプログラムロジック^{※2}を組み、指標を当ててその効果を測定する、という一般的な評価の流れは踏まないこととした。市民の自発性に支えられた新たな社会的なムーブメントであるこども食堂の活動が生み出す価値に対して、外部者が一方的に評価軸を決めて価値を判断することは意味をなさないばかりか、むしろ活動の可能性をしばめてしまうというような弊害が大きいと考えたためである。そのためさくらプロジェクトでは、こども食堂運営者が参加型でその多様な価値を抽出する方法を模索・検討してきた。

※2 ロジックモデルやセオリー・オブ・チェンジのこと。

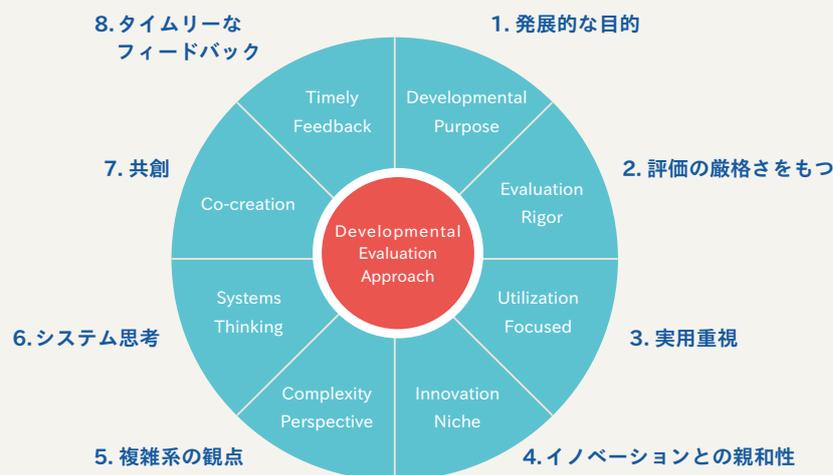
【参考】発展的評価について

発展的評価とは、社会イノベーションなど、目的が固定されているというよりも目的自体が変化し、時間軸も予め設定されているというよりも流動的で前進的な対象を評価するための評価のやり方である。そこから得ようとするのは、外部への説明責任というよりも、イノベーションや変化から学習することである。

Patton, Michael Q. (2011), *Developmental Evaluation: Applying Complexity Concepts to Enhance Innovation and Use*, New York: The Guilford Press.

発展的評価 Developmental Evaluation	形成的評価 Formative Evaluation	総括的評価 Summative Evaluation
事業(や事象)が発展・変遷・様変わりしているとき	事業の改善の余地があるとき	事業がすでに確立しているとき
社会的介入の適応に向けたデザインを行い、主に発展・変革を志向する	進行中のプログラムのモニタリングおよび事業改善を志向する	プログラムが目標を達成したかどうかの判断をおおぎ、アカウンタビリティ確保を志向する

以下の8つの原則は、発展的評価をおこなうものが持つべき基本的なマインドセットであり、すべてが必須の原則となる。



今回のさくらプロジェクトでは参加型評価のアプローチを大いに用いたが、それらは発展的評価の一環として活用している。(A Developmental Evaluation Companion, 2021, McConnell-Foundationの整理に基づいている)

2-3 3年間のあゆみ

これまでのさくらプロジェクトの3年間の歩みをまとめると以下ようになる。プロジェクトは2019年度の終盤からはじまり2020年度前半はコロナの影響直後では活動ができなかったため、2019年度と2020年度はひとまとめにして表現する。

表1 さくらプロジェクト3年間のあゆみ

	2019-2020年度	2021年度	2022年度
位置付け	評価のための基礎調査や関係者との協議	評価モデルの構築	評価モデルの活用
成果物	さくらの木モデルの整理	地域ネットワーク団体のセオリー MSC ツールキット サポートキット	MSC 実施の結果 サポートキット実施の結果 全国調査データを活用した二次調査結果 価値研究会の記録
実施内容(概要)	5つのバリューについてのデスクトップ調査および、関係者へのヒアリング調査、現地訪問、評価ワークショップ実施など * 2019年度後半からはじまり、その後新型コロナウイルス感染症拡大にともない、2020年度事業の開始を遅らせた。	地域ネットワーク団体およびこども食堂への評価支援の実施 そのプロセス中での MSC ツールキットの制作※(MSC 手法の簡略化とまとめ動画制作)と、地域内での実装 さくらの花びらサポートキット※の開発(内部のみ)	サポートキットの地域内での実装 MSC ツールキットの展開、ファシリテーター養成 さくらプロジェクトの価値研究会の開催 全国調査結果からの読み解き
体制(連携先)	2019年度：滋賀県社会福祉協議会、北九州市 2020年度：上記2団体に加えて、諏訪圏域子ども応援プラットフォーム	評価伴走の関わり方の濃度が異なる以下2種類の関わりをした。 濃い伴走拠点※(2拠点)：滋賀県社会福祉協議会、諏訪圏域子ども応援プラットフォーム 薄い伴走拠点※(6拠点)：青森県社会福祉協議会、フードバンク八王子、和歌山県こども食堂ネットワーク、堺市社会福祉協議会、鳥取市地域食堂ネットワーク、さが・こども未来応援プロジェクト実行委員会	サポートキットの実施においては、以下2種類の関わりをした。 地域ネットワーク介入拠点※(5拠点)：これまでさくらプロジェクトに関わった地域ネットワーク団体がカウンターパートとなり、こども食堂に呼びかけをおこなってサポートキットのトライアル使用・検証を実施。 立候補拠点※：全国から募集してサポートキットのトライアル使用・検証を実施。
共同実施団体	一般財団法人CSOネットワーク(2019年度)、株式会社ブルー・マーブル・ジャパン(2020年度)	株式会社ブルー・マーブル・ジャパン	株式会社ブルー・マーブル・ジャパン

※3 詳しくは4-2にて触れる

※4 詳しくは4-3にて触れる

※5 評価伴走を手厚く行い、地域ネットワーク団体レベルのセオリーの整理も行った拠点

※6 こども食堂のみで評価伴走をおこなった拠点

※7 サポートキットを使用するこども食堂へのサポートを地域ネットワーク団体と連携して実施した地域拠点

※8 サポートキットを使用するこども食堂を全国から募集してサポートを実施した取り組み



図 6 評価ワークショップの様子(2019年度、滋賀県・北九州市)

2-4 プロジェクト実施体制

以下にさくらプロジェクトの実施体制を示す。毎月三菱商事も交えて、むすびえ-ブルー・マーブル・ジャパンで会議を行い、その他にブルー・マーブル・ジャパン内部での会議、ブルー・マーブル・ジャパン側の評価伴走者と地域ネットワーク団体および子ども食堂とのやりとりが発生した。

表 2 さくらプロジェクトの評価推進体制

2019-2020 年度	2021 年度	2022 年度
一般財団法人 CSO ネットワーク 株式会社ブルー・マーブル・ジャパン ・今田克司(全体統括) ・千葉直紀(コーディネート) ・原口唯(株式会社 YOUI、北九州担当) ・松村幸裕子(滋賀県担当)	株式会社ブルー・マーブル・ジャパン ・今田克司(全体統括) ・千葉直紀(コーディネート、滋賀県・諏訪圏域・八王子担当、MSC ツールキット開発担当) ・原口唯(株式会社 YOUI、諏訪圏域・佐賀県担当) ・鎌倉幸子(青森県担当) ・松村幸裕子(和歌山県・堺市担当) ・林理恵(サポートキット開発担当)	株式会社ブルー・マーブル・ジャパン ・今田克司(全体統括) ・千葉直紀(コーディネート、滋賀県担当) ・原口唯(株式会社 YOUI、諏訪圏域・佐賀県担当) ・松村幸裕子(有限会社ひかり、青森県担当) ・鎌田淳(コネクティブ合同会社、八王子担当) ・林理恵(サポートキット運用担当) ・中村さえこ(ワーク・シンフォニー株式会社、データ分析担当)
株式会社メトリクスワークコンサルタンツに再委託 (定量評価の可能性に関する調査。2019 年度) ・青柳 恵太郎 ・西野 宏		

2-5 プロジェクトへの協力団体

表3に、2019年度-2022年度にわたっての本プロジェクトの協力団体を示す。尚、食堂名の末尾に★をつけたこども食堂は、後述する2022年度のサポートキットの実証に参加して指標に基づいたデータを取得した食堂である。

表3 さくらプロジェクトへの協力団体

地域拠点	年度	地域ネットワーク団体	こども食堂
青森県	2021-2022	青森県社会福祉協議会	・ちょうじゃこども食堂★ ・憩いの広場ここまる★ ・こども食堂、すこやか★ ・みんなの食堂アエル
長野県諏訪圏域	2021-2022	諏訪圏域子ども応援プラットフォーム	・グリュックこどもカフェ★ ・小さな居場所 ヨリバ★ ・共に咲く花の会★ ・わくわくキッチン楽人★ ・信州こども食堂温泉寺★ ・ちゃんちゃんこ★ ・ももも★ ・コミュ・きっちゃん天香★ ・みんなのお家すまいる★
東京都八王子市	2021-2022	フードバンク八王子	・すまいるカフェ★ ・はちおうじ子ども食堂★ ・虹色食堂★ ・なかよし子ども食堂★ ・お茶の間民★ ・光明八木町食堂 ・さくら子ども食堂 ・dattochi みんなの食堂
滋賀県	2019-2022	滋賀県社会福祉協議会	・アモーレ子ども食堂★ ・逢坂 smiledoor 子ども食堂★ ・むさっ子食堂★ ・子ども食堂あおぞら★ ・子ども食堂ひがしっこ★ ・スマイル甲賀大原っ子★ ・わつなぎ食堂★ ・新旭駅前ふれあい食堂★ ・やんちゃ寺食堂★ ・晴嵐みんなの食堂 ・湖北子ども食堂「Liaison (リエゾン)」
大阪府堺市	2021	堺市社会福祉協議会	・きたっこキッチン ・子ども食堂ひみつ基地 ・キッチン錦綾 ・子ども食堂クレヨン ・子どもカフェ GRACIAS ・ぎみの森 ・やかみっこキッチン ・向丘みんな食堂 ・にぎわいこども食堂
和歌山県	2021	和歌山県こども食堂ネットワーク	・胡麻生こども食堂「ぼれぼれ」 ・楽しいは美味しい友の会 ・ガマやしき ・特定非営利活動法人子どもの生活支援ネットワークこ・はうす ・ぼかぼかこども食堂 ・ありがとう畑こども食堂 ・にじいろこども会 ・おのみなこども食堂 ・みやぎたこども食堂 ・ほんまち子ども食堂
鳥取県	2021	鳥取市地域食堂ネットワーク	・きりんこども食堂 ・市役所すなばこども食堂 ・来未完(みかん) 食堂 ・ふれあい食堂 ・にじいろ Cafe
佐賀県	2021-2022	(一社) さが・こども未来応援プロジェクト実行委員会	・ここてらす★ ・佐賀こども食堂★ ・居場所そら★ ・わかち愛子ども食堂★
福岡県北九州市	2019-2020	北九州市	・子ども食堂 食育「五つの力」 ・くれかきっちゃん@ポートレース若松 ・子ども食堂 くすくす ・絆キッチン ・子ども食堂☆きらきら清水
その他(立候補拠点として全国から募集)	2022	-	・いっぽん松こども食堂(ピカブー) ★ ・ひだまり子ども食堂★

【参考】全国のこども食堂数の推移

以下に、さくらプロジェクト開始時から終了時までの全国のこども食堂数の推移を示す。むすびえおよび地域ネットワーク団体が毎年行なっている箇所数調査によると、2019年度は3,718箇所、2022年度は7,363箇所にまで増加している。3年間でおよそ2倍に増えている。こども食堂という活動は、制度の裏付けがあるものではなく、届出る必要性もないため、あくまでも調査の集計結果であるが、年々着実に増加していることがわかる。

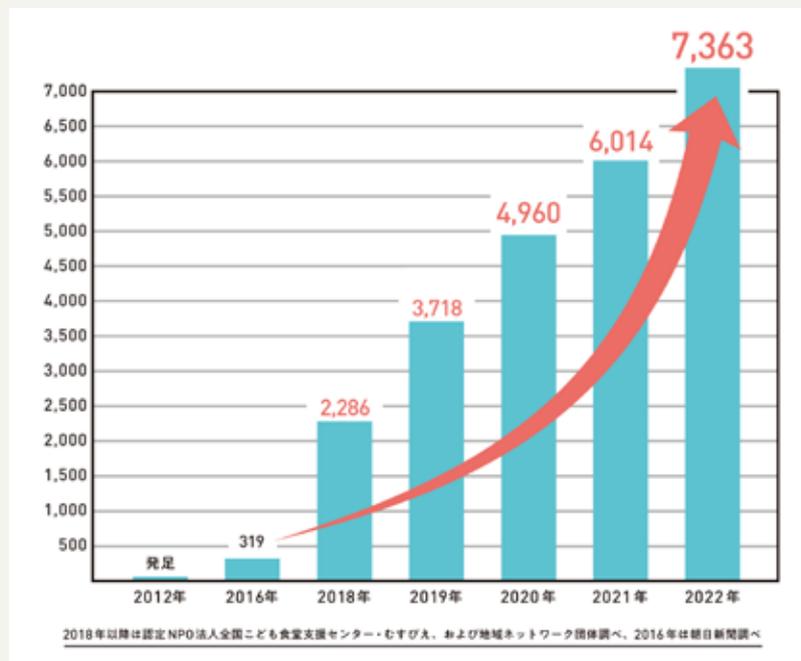


図7 こども食堂の箇所の推移

※2023年2月確定値発表

(参考:全国の小学校は約2万校、中学校は約1万校、児童館は約4,000か所。)

3 地域ネットワーク団体での評価の取り組み

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大に見舞われた状態で事業年度が始まった。感染拡大が懸念される中で、こども食堂への声かけは慎重になりながらも、地域ネットワーク団体である滋賀県社会福祉協議会と諏訪圏域子ども応援プラットフォームで議論を重ねた。尚、北九州市は諸般の事情により、この時点でさくらプロジェクトの実証参加からは降りている。

2020-2021年度において、こども食堂の価値を「見える化」する取り組みの一環として、滋賀と諏訪の地域ネットワーク団体の単位で、セオリー構築を実施することとした。セオリー構築は、こども食堂の価値は地域ネットワーク団体が創出する価値と密接な関係があり、地域ネットワーク団体がこども食堂の価値をよく理解しているという仮定のもと、地域ネットワーク団体のこども食堂との関わりが、地域の課題解決に向けてどのような道筋でいかなる効果や価値を生み出しているかを言語化、ビジュアル化するものである。感染拡大が進む中でこども食堂を集めた対面ワークショップなどがしづらい中、参加型の手法を重視し、地域ネットワーク団体と対話を繰り返して実施した。

3-1 滋賀県におけるセオリー構築

[1] 滋賀県社会福祉協議会(地域ネットワーク団体)

2021年度、滋賀県では滋賀県社会福祉協議会(以下、滋賀県社協)と県内のこども食堂5拠点の協力を得て、それぞれの評価ワークショップ等を行うことで、こども食堂の価値の深掘りを試みた。

参考までに、滋賀県社協は県内の全小学校区へのこども食堂の設置(県内300箇所)を目標としており、さくらプロジェクト開始の2019年時点で128箇所、さくらプロジェクト終了の2022年時点で176箇所となった。3年間での増加率はおよそ1.4倍であり、こども食堂の新規立ち上げや継続に、滋賀県社協や県内の市町社協が寄与している。

以下に、さくらプロジェクトでの滋賀県における評価実践の概要をまとめる。

表4 2021年度の滋賀県における評価の取り組みの概要

対象	実施協力者	実施内容	備考
(i) 滋賀県社協	県社協職員 岩本、兼野、久保 一部参加：山本、黄瀬	会議およびワークショップ形式で、以下の内容を実施。 ・セオリー構築 ・今後のデータ収集とレポートニングに向けた実施内容の整理 ・上記について、作戦会議メンバーからのフィードバックをもらった。	三菱商事にも一部同席・参加いただいた。
(ii) 滋賀県内のこども食堂運営者	こども食堂5拠点の主催者 ・晴嵐みんなの食堂(谷口) ・湖北子ども食堂「Liaison(リエゾン)」(北居) ・新旭駅前ふれあい食堂(森田) ・むさっ子食堂(石田) ・ひがしっこ食堂(小西)	こども食堂の作戦会議と称して、ワークショップ形式で、以下の内容を実施。 ・価値領域の特定 ・セオリー構築 ・指標選定 ・データ収集 ・結果の読み解き	三菱商事にも同席・参加いただいた。

実施協力者は敬称略

滋賀県社協としての評価の第一歩目として、セオリー構築に取り組んだ。下図が、その成果物である。これにより、滋賀県社協がこども食堂の取り組みを行うとはどういうことなのか、食堂の関係者や支援者にどのような変化が期待できるのか、自団体のミッションや地域との関係で何をを目指すのか、どのような支援をこども食堂におこなえばよいかが明確になったと考えられる。



図8 地域ネットワーク団体（滋賀県社会福祉協議会）とのワークショップの様子



図9 滋賀県社協のセオリー

滋賀県社協としてのセオリー構築における気づきとして、職員からは以下のようなコメントが挙げられた。

- 中間支援団体として、セオリー構築をすることで、今、自分たちが行っているたくさんの支援がこども食堂の皆さんにとって、どんな意味がありどんな価値が生まれるのか、内部で共通認識を持つことができた。共通認識をもつことで目的がぶれなくなると感じた。
- 现阶段の目標を改めて振り返ることで、新たな目標設定をすることもでき、セオリーの改善を行うことができる。

- 県社協の取り組み「知識やツールの提供」として、子ども食堂へ様々な研修会など実施して皆さんにも学んでいただく機会を設けているが、距離的・時間的な様々な理由で、全ての団体に参加してもらっている訳ではない。参加してもらうためにどうしていったらよいか新たな課題が見えてきた。継続的に研修会に参加してもらう方法を考えたい。
- 中間支援団体として、子ども食堂が「どんな子ども食堂を目指すのか」明確にしてもらうことにより、今後の支援・コミュニケーション面に非常に役立つと思う。

なお、これらの実践については、むすびえ主催の2021年度子ども食堂全国交流会（2022年2月5日開催）で発表しており、会場から「滋賀県社協の取り組みが参考になった」、「自分の組織でも検討したい」などのポジティブなコメントが複数寄せられている。

[2] 滋賀県内の子ども食堂

また、2021年度に、個々の子ども食堂の評価支援を行った。子ども食堂の価値の深掘りを行うこと、そしてその実施プロセスを通して、子ども食堂が自ら価値を扱うためのヒントを得ることを目的として、子ども食堂運営者に集ってもらい、全6回の通称”作戦会議”（2021年9月-2022年3月）を開催した。以下に内容を示す。

実施プロセス	実施内容
1. 価値領域の選定	各食堂の名前に、「価値に関する冠（枕詞）」をつけてもらうワークを実施
2. 指標の選択	各食堂に、指標リストを参考に大事だと思う指標選択+独自設定をってもらうワークを実施
3. セオリー組み立て	選択した子ども食堂の冠（価値領域）と指標から、簡易的にセオリー構築
4. 活用目的の設定	データを取る前に、「なんのためにデータを取るか」、「どう役立てたいか」を整理
5. データ収集方法の検討	各食堂の現実的な制約を加味して、データ収集方法を検討
6. データ収集	現場でデータ収集を実施
7. データ収集結果の解釈	参加者で結果の解釈を実施
8. 評価プロセス全体の振り返り	作戦会議で実施したプロセスを振り返り、学びを抽出

表 5 滋賀県内の子ども食堂作戦会議の実施内容



図 10 滋賀県内の子ども食堂作戦会議の様子

作戦会議のプロセスを経て、各食堂の「枕詞／価値領域の選定」（赤文字が枕詞、◆が価値領域）、「重要な指標選択結果」、「評価の活用目的の設定」、「データ収集方法の検討」などを見出した。

食堂名	枕詞 価値領域の選定	重要な指標選択結果 (一例)	活用目的の設定	データ収集方法の検討
晴嵐みんなの食堂	子どもよりそうみんなの食堂 ◆地域活性・にぎわいづくり ◆子育て支援	・遊びのバリエーション増加 ・子どもが子どもを誘ってくる ・関わる人の層の厚さ（所属、肩書き、立場、年齢、得意等）	地域のまなざしを変えるために、スタッフや支援者など共有の輪を広げる。	スタッフとの振り返り会。食堂運営の各種フォームを変える。
湖北子ども食堂「Liaison（リエゾン）」	ひとりぼっちを防ぐ ◆地域活性・にぎわいづくり ◆子育て支援、子どもたちの成長	・子ども食堂に関わる地域の人が増える ・自らなんらかの変化行動をとる人の数	スタッフのモチベーション・キープによる子ども食堂の継続に役立たせたい。地域の方に、存在意義を自信を持って伝えられるようにしたい。	スタッフと情報を共有できるボードを作り、誰もが書き込めるようにする。LINEによるエピソード収集。
新旭駅前ふれあい食堂	多世代交流型食堂 ◆5領域すべて ◆地域活性・にぎわいづくり	・参加者、支援者の輪の広がり	ボランティアの生きがいにつながっているか確かめたい。	ボランティアへの聞き取り。
むさっ子食堂	つながり作り ◆5領域すべて ◆中心は子どもの笑顔	・健康観察でひっかかる子どもが減る	学校と連携することで、地域の親や子どもたちの育ちを支援できるようにする。	学校給食残食率のデータを学校にとってもらう。学校と協力して子どもにアンケートをとってもらう。
ひがしっこ食堂	平等に参加 子どもから高齢者、地域の ◆にぎわいづくり、地域活性化 ◆高齢者の健康	・子ども食堂への参加者数 ・子ども食堂がほっとする居場所になっているか	振り返りによるスタッフ同士の情報共有。情報発信による地域の食堂の理解を進める。	子どもたちへの聞き取りアンケート。

表 6 滋賀県内のこども食堂作戦会議の成果物のまとめ

こども食堂運営者が自ら評価活動をおこなう意義や課題について、この作戦会議の様子を踏まえて、滋賀県社協職員から以下のようなコメントを得た。

[意義・メリット]

- セオリー構築によってこども食堂が「どんなこども食堂を目指すのか」明確にしてもらうことにより、中間支援団体として、今後の支援・コミュニケーション面に非常に役立つと思う。
- こども食堂の皆さんそれぞれが活動されていく中で悩んだりすること、自分たちが本当に大事にしたいことは何なのか。長く活動している団体は今までの自分たちの活動をふりかえり、またこれからこういったこども食堂を目指すのか一緒に考えることができる。
- こども食堂さんが自分たちの活動の価値を認識し、言語化できることによって、周囲に協力をあおぎやすくなる。広報やPRにも役立つ。モチベーションを保ち、意欲的に活動することができる。

【課題】

- 食堂運営者だけで評価活動を行うことは知識、スキル面で難しい。
- 評価の指標を取るときに、スタッフへの協力を仰ぐ必要があるため、代表者がこの評価を行う意義を伝えて、スタッフに賛同を得るまでの難しさがある。

また全6回の作戦会議を通じて見えてきた「こども食堂の価値の共通項」に関する気づきを、以下にまとめる。

● 共通アウトカム、価値の源泉としての「参加者の多様性」と「参加者の広がり」

県内5箇所の食堂（地域コミュニティ型）の価値の共通項として、「参加者の多様性（職業、立場、年齢、得意なこと）」と「参加者の広がり（参加・支援など関わる人が増える）」が挙げられた。それぞれの食堂が貢献する価値領域は、地域性や運営者が食堂を始めたときの問題意識にひもづくことが多く、多様である。「こども食堂の参加者の多様性」と「参加者の広がり」が他のアウトカム創出の源泉（手段）となって、理想の地域の実現につながっていくという整理ができるだろう。

● 地域コミュニティ型食堂ならではの指標の共通性

重要な指標の選択について、食堂ごとの個性はあるが、価値領域が異なっても共通項が思いのほか多いことが明らかになった。これらの共通項は、地域コミュニティ型食堂の指標セットとして活用できる可能性があるのではないかと考えられる。

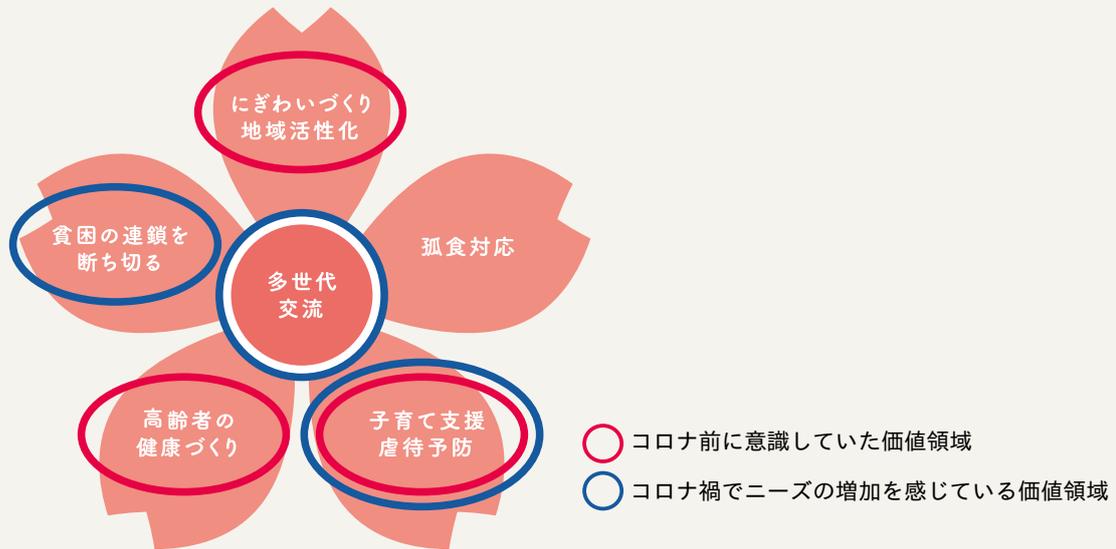
● 上位アウトカムの意味合いとして含まれる「子どもの幸せの実現」、「地域の力の向上」

作戦会議参加のこども食堂が描いたセオリーの上位にくるアウトカムとして、子どもや地域の変化が共通項として描かれていた。子どもの変化としては、「子どもの友人同士の会話が増える、認め合いが増える」、「子どもの夢ができる」、「健康診断でひっかかる子どもが減る」など「子どもの幸せの実現」に関する内容である。地域の変化としては、「学校と地域が連携することで、いろんな眼差しの中で（子どもが）見守られるようになる」など「地域の力の向上」に関する内容である（セオリーとして描かれていないが、「地域の力の向上」の重要性は第6回会議で挙げられた）。さらに、そのような意図を地域に対して発信し、地域の人たちの巻き込みにつなげていければ理想的である、というコメントも挙げられた。

参考として、滋賀県の実践においてコロナ禍初期（2020年度）に行なった「緊急時も含めたニューノーマル（新しい平時）の状態」におけるバリュー抽出の結果を示す。これはこども食堂の方へのアンケートおよびワークショップ結果から抽出している。緊急事態下では、感染予防のため活動休止を余儀なくされたこども食堂も多々あったようであるが、ニーズの増加を感じている価値領域が変化したり、コロナ禍でできることを考える運営者が多く、こども食堂が果たす役割や提供価値は柔軟にシフトしていたことがわかる。こども食堂運営者からは、「コロナ禍において、しんどい家庭がよりしんどくなる、しんどくなかった家庭がしんどくなるケースがある」などの声が聞かれた。

【参考】コロナ禍において深刻化した課題の例

- 非正規雇用の方が多く、仕事がなくなったり、収入が減っている。【貧困】
- 子どもの遊びにも制限があり、母子ともにストレスが溜まってきている。【子育て、虐待】



3-2 諏訪圏域におけるセオリー構築

[1] 諏訪圏域子ども応援プラットフォーム(地域ネットワーク団体)

2021年度、諏訪圏域におけるこども食堂共通のセオリー、指標の見直しおよび各こども食堂のセオリー、指標の設定を行なった。以下の表7に、実施概要と結果をまとめる。諏訪圏域の場合は地域ネットワーク団体がこども食堂で構成されるプラットフォーム組織であるため、地域ネットワーク団体とこども食堂のアクターの重複が多いことが特徴である。表7の(i)が地域ネットワーク団体、(ii)がこども食堂である。

対象	実施協力者	実施内容	備考
(i) 諏訪圏域子ども応援プラットフォーム	こども食堂6拠点の主催者 ・ちゃんちゃんこ(宮原) ・コミュ・きっちゃん天香(八幡) ・小さな居場所「ヨリバ」(上條) ・みんなのお家すまいる(木村) ・グリユックこどもカフェ(村上) ・ゆめひろ(井手)	会議およびワークショップ形式で、以下の内容を実施。 ・セオリー構築 ・指標選定	三菱商事にも同席・参加いただいた。
(ii) こども食堂	こども食堂7拠点の主催者 ・ちゃんちゃんこ(宮原) ・コミュ・きっちゃん天香(八幡) ・小さな居場所「ヨリバ」(上條) ・みんなのお家すまいる(木村) ・グリユックこどもカフェ(村上) ・あとリエもも(石田) ・学び舎 楽人(曾根原)	会議およびワークショップ形式で、以下の内容を実施。 ・価値領域の特定 ・セオリー構築 ・指標選定	

表7 2021年度の諏訪圏域におけるセオリー構築等の概要

実施協力者は敬称略



図 11 地域ネットワーク団体(諏訪圏域子ども応援プラットフォーム)とのワークショップの様子

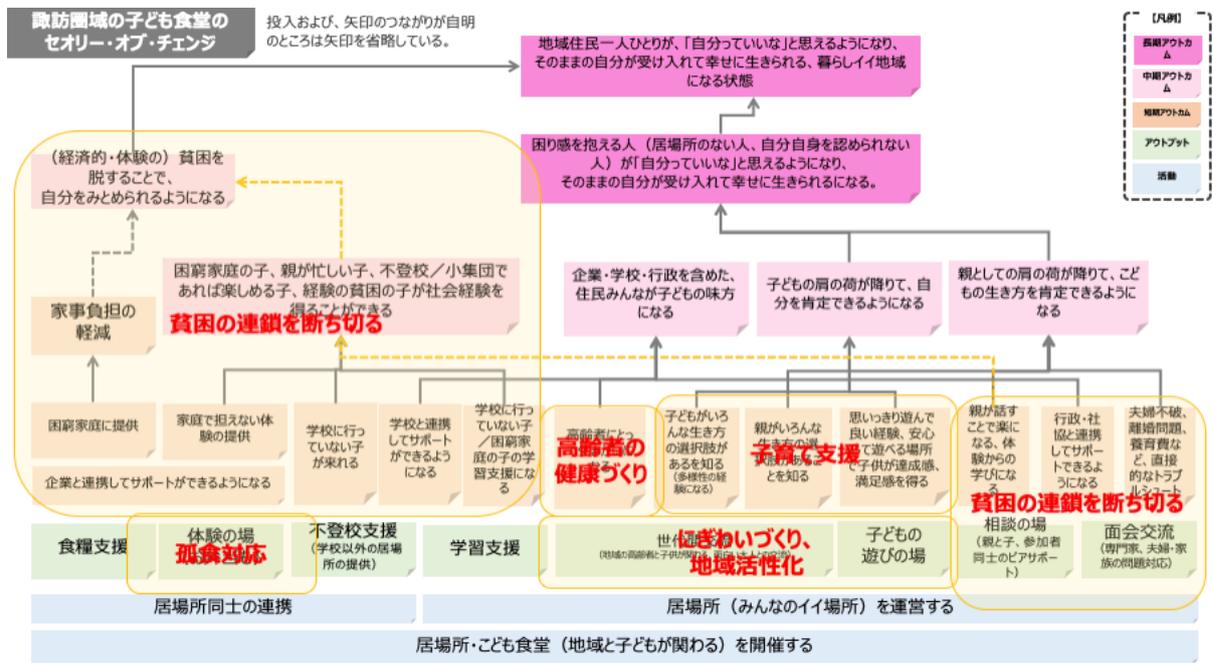


図 12 諏訪圏域子ども応援プラットフォームとしてのセオリー

諏訪圏域子ども応援プラットフォーム全体のセオリー構築、指標の見直しを通じての気づきは以下の通りである。

- 前回は納得感あって進めていたはずだったが、一度作成をしてから期間を置いて改めて眺めてみると、いい意味で違和感が出てくることに気付いた。
- セオリーを眺めながら「こんなことを見落としていたのか!」と思ったが、実は自分が変化・成長しているからなのかも、と思い直した。日々、ただ動くだけではなく、原点にふりかえることが大事だと思う。

- セオリーや指標を介して話をすると、普段考えていることが整理されて出てくるのだな、と感じる。ほかのメンバーも含めて話をすると、関係者全体で納得感を得られることが多くなるのではないかな、と思った。
- 数で変化をとらえることと、現状の活動をうまくつなげられるか、もやもやしているが、きっとみんなでもうまくやっているとと思う。
- 最終的には、自分たちの活動がなくなることをめざしているが、評価と実践のバランス難しい…が、数は重要な側面もあるので、頑張っていきたい。

[2] 諏訪圏域のこども食堂

また、2021年度は諏訪圏域のこども食堂7団体が、滋賀県で活用した指標リストを見ながら、大事だと思う指標や追加すべき指標についての意見交換を実施した。その他に、食堂ごとの「食堂のキャッチフレーズ（関心のある価値）」、「対象とアウトカム」、「重要な指標案」、「データ収集方法の検討」についてまとめた。その結果は割愛するが、以下にこの一連のプロセスを経て見えてきた「こども食堂の価値の共通項」についてまとめる。

- 価値の共通項として、「リピーター（会議中ではレギュラーという単語でも説明された、何度も訪れる人の意）の数」や「口コミの数」「参加していなくても存在を知っている人の数」「行政の変化」などが挙げられた。こども食堂の認知・価値を感じる社会環境になっているか？をこれらの指標から評価したいという意図がみられた。
- なお、それぞれの食堂が貢献する主な価値領域は、「子育て・虐待予防」「地域活性化」を挙げる食堂が多かった。ただし、不登校児の親子支援に取り組むこども食堂運営者がプラットフォームのキーパーソンになっていることの影響があるかもしれないといった懸念も、参加者の声として挙げられた。
- 一方で、ワークショップ中には、こども食堂の価値を5つの花びらに分類をすることに対する違和感なども口にされた。
- 具体的には、「5つのバリューのためにやっているわけではなく、やった結果、この5つも出てきている、という感じ。」「5つのバリューは、支援している側の目線が強い印象がある。子ども自身や当事者目線でのバリューではない。」「自分らしくいられる」「おなか一杯食べられる」「人とつながる」「相談できる」…といった関係性づくりが価値なのではないかなどのコメントが挙げられた。
- それと同時に、助成金申請などの際には、いわゆる「5つの花びら」による評価を示さなければいけないという必要性についても認識がなされている。
- 地域の中で、失われた関係性を取り戻すこと、またその行為であるこども食堂活動を社会化させていくことに価値を感じて活動している様子が示された。

3-3 地域ネットワーク団体(滋賀県、諏訪圏域)によるセオリー構築でわかったこと、学んだこと

2021年度の濃い伴走拠点(滋賀県、諏訪圏域)によって得られた示唆について、特に以下は特記しておきたい。

- 「参加の広がり」による最終的な「地域の変化」を目指すなど、こども食堂の価値についての共通見解が数多く聞かれた。同時に、そして共通性以上に、こども食堂の多様性も浮き彫りになっており、必ずしもさくらの5つの花びらに集約できない価値が日々のこども食堂の運営から生み出され、価値として発見されていることは意識すべきであろう。こども食堂の価値の集約作業を進める一方で、集約された内容からこぼれおちてしまうような価値について常にフォローしていけるような評価デザインが求められている。
- 評価の効用に関する明確な理解がワークショップ参加者等の中で徐々に広がっている。これについては、すでに話題にのぼっている内部向け、外部向けの効用に分けてさらに整理し、拠点をまたがった理解をさらに促進していくことに意味があると考えられる。
- 体系立った評価を行うには、伴走者の存在は必須であり、評価の専門性のみならず、的確な伴走ができる支援者の養成が急務と考えられる。
- 日々のこども食堂運営にデータ収集を入れ込む工夫をすることは評価を適切に行なっていくうえでは必須だが、その手間を取る意義を感じているこども食堂関係者はまだ少数であると考えられる。この点を克服していくには、データ収集と分析からの発見を学びとしてさらなる事業改善へと結び付けられるという実感が広がっていくことが必要である。
- 上記の点と関連して、データ管理の重要性を十分に理解し、地域拠点やこども食堂をこの面で支援する仕組みをむすびえが確立していくことが求められているのではないか。

4 こども食堂の価値を捉える評価アプローチ

2021年度までの期間で、地域ネットワーク団体の協力によりこども食堂の価値を適切に捉えるための評価アプローチの適用の検討を行なった。その中で滋賀県・諏訪圏域で地域ネットワーク団体にこども食堂をコーディネートしてもらい、いくつかの評価ワークショップやディスカッションを行う中で、以下の2つの評価手法の着想を得て、現場が運用するためのツールとしてまとめた。これらの評価手法を現場のこども食堂の運営者の参加型で開発したことにより、実際に活用していく手応えを得ることができた。



図13 MSCツールキットとさくらの花びらサポートキットの概要・特徴

4-1 こども食堂のセオリー構築の限界

例えば、2020年度の後半に滋賀県内のこども食堂を集めて、セオリー構築のワークショップを実施した。滋賀県社協のスタッフとむすびえにもファシリテーターとなってもらい、活動のスタンスが同じ／近いこども食堂を3グループに分けてロジックモデル構築を行なった。

ワークショップの時間制約やファシリテーションの習熟度による要因もあるが、3グループともうまくプログラム・ロジック(セオリー)としてまとまらなかった。何より一番気になったのは、こども食堂の関係者の納得感が低そうに見えたことである。もちろんセオリー上で「誰のどのような変化」がより上位に来るアウトカムなのかを真剣に議論することは非常に有用であったが、特にアウトカム同士の関係性を考えることが大変困難であった。通常、プログラム(なんらかの事業体)に対して、そのプログラムの関係者とセオリーづくりを行うとうまく集約していくものだが、本ワークショップにおけるこども食堂の場合はその集約がなされていかなかった。このことが意味することは、多様なこども食堂がある中で特定の目的と手段の関係に収束させることが困難ということであると考える。つまり、こども食堂は特定の課題解決という明確な目的を持った地域活動ではなく、地域住民の自発的活動であり、活動目的は食堂運営者によって様々であるということ、また同じ地域で活動のスタンスが近いと思われる食堂同士でもひとつのセオリーに集約させることは困難であるということの意味していると考えられる。

今回採用した発展的評価の評価アプローチでは、図14に示すように、明確な目的を持った事業とそうでない（明確な目的を持たない）取り組みが区別される。明確な目的を持った事業であれば、その目的を達成するための道筋を言語化したセオリーは構築されるべき（図14の左側「成果・改善」）だが、解決したい特定課題や明確な目的を持たない取り組みは、必ずしもそういった道筋を構想できるものでないし、それをすることが、無理矢理評価の枠にはめるということにつながりかねない。実際、そういった枠にはめられない（はめるべきでない）取り組みに対応する評価アプローチとして編み出されてきたものが発展的評価である（図14の右側「発展型」）。こども食堂は、この「そうでない取り組み」として理解できる場合が多く、よって、こども食堂におけるセオリー構築の困難さは、発展的評価のような評価アプローチとの親和性を表していると言える。

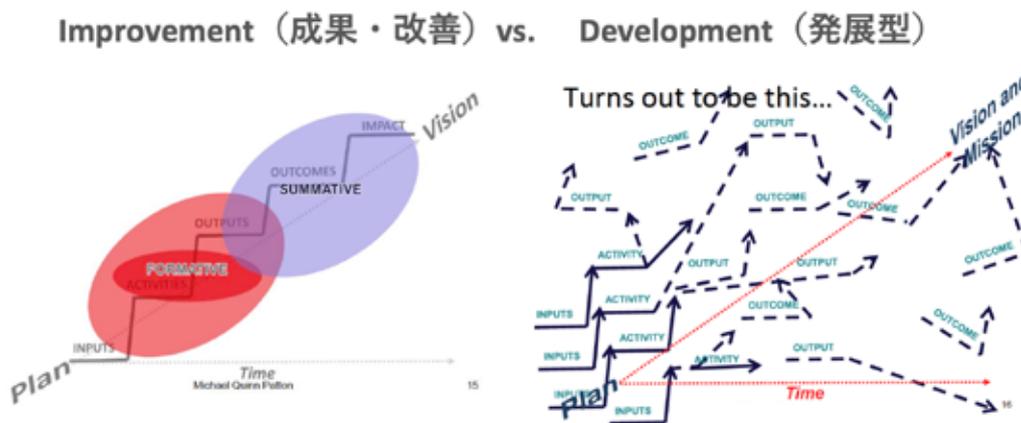


図14 線形的なセオリーの限界を示すイメージ図※

※3 マイケル・クイン・パットン氏 講義資料(2017)より

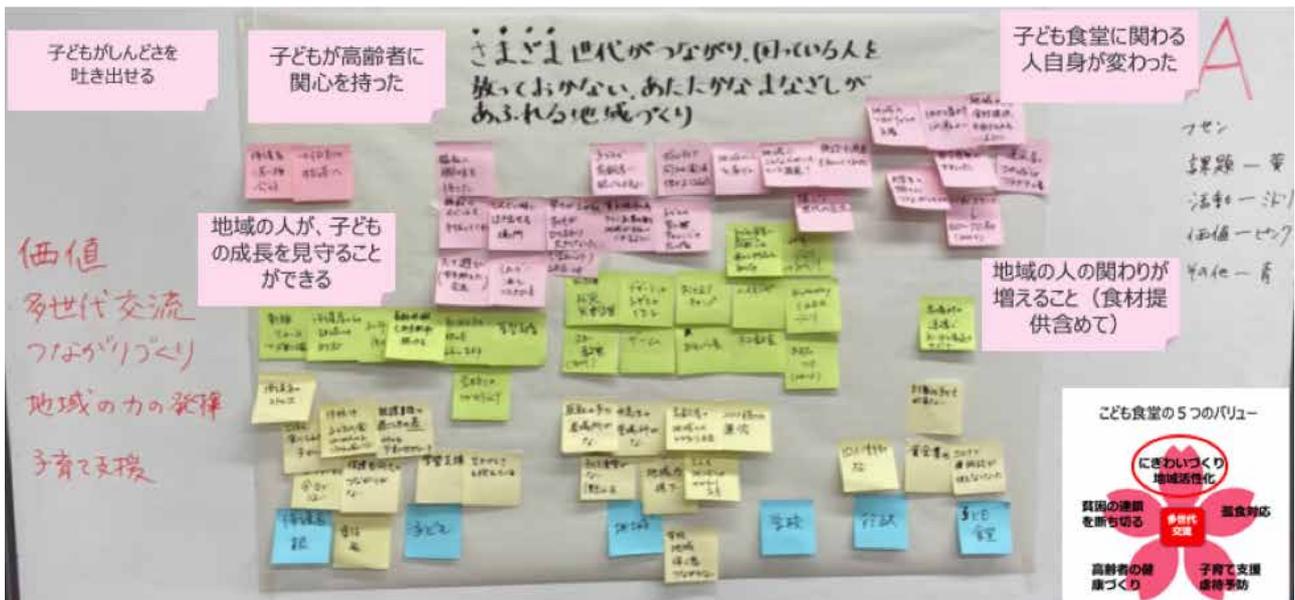


図15 こども食堂によるロジックモデルワークショップの結果の例

4-2 MSC ツールキットの開発

そこで、セオリーづくりを介さない評価手法を検討する中で候補に挙げたのがMSC (Most Significant Change) である。きっかけは、2020年度に滋賀県内のこども食堂を集めて実施した2種類のワークショップ(前述したセオリー構築ワークショップとMSCワークショップ)の手応え[※]により、着想を得たことである。食堂運営者たちと交流する際に、よく宝物のように数々のエピソードを話していたし、滋賀県社協の職員によく立ち話や電話で嬉しかったエピソードを報告してくれる、それらを書き取ったメモが多くあるということを知っていたことも着眼の理由である。

MSCツールキットは参加型評価の一手法であるMSCをこども食堂が活用しやすいようにステップを簡略化して、ワークショップ形式としてまとめたものである。MSCは、定性評価の手法として用いられる、多くの利害関係者(ステークホルダー)が関与する参加型モニタリング・評価手法であり、2004年にRick DaviesとJess Dartによって開発されている。MSCガイドでは全10ステップ紹介されているが、開発者に許可をとりそのうちの3ステップを抜き出してワークショップ形式に落とした。また覚えやすくするための呼称の工夫として、MSCの頭文字を取って「もっとも(M)、すげー(S)、チェンジ(C)」と紹介した。

MSCの3ステップ

ステップ1:こども食堂の現場から「大事にしたい変化のエピソード」を集める

ステップ2:みんなから出た「もっとも大事にしたい変化のエピソード」の中から「もっともすげーチェンジ」を選ぶ

ステップ3:なぜ、その物語が「一番大事にしたい変化の物語」として選ばれたかをみんなを確認する、噛み締める

付属資料にMSCツールキットの詳細を示す。



図 16 MSCツールキット(動画)のイメージ

※8 ロジックモデル・ワークショップは、同じタイプの食堂を集めた3グループで実施したが、どのグループでもセオリーの収束が困難であり、参加した食堂運営者も消化不良という印象を受けた。一方でMSCワークショップでは、食堂運営者から「最も重大な変化の物語」が生き生きと出てきて大いに盛り上がった。

4-3 さくらの花びらサポートキットの開発

さらに、さくらの5つの花びらをベースに、こども食堂自身が自分たちの活動の価値領域を認識し、その価値を評価する仕組みとしてさくらの花びらサポートキット（以下、サポートキット）をこども食堂の評価モデルとして開発した。サポートキットの開発は、2020-2021年度の滋賀県と諏訪圏域での地域ネットワーク団体での評価実践が元となっている。

2021度は、こども食堂が大切にしていることを中心とした価値を意識化、測定し、運営改善に活かす一連の仕組みづくり（「発見編」と「運営編」）を行い、2022年度は、その試験的運用を行なった。発見編および運営編を通して、こども食堂を評価する流れは以下1～7の通りである。ただし、本報告書執筆段階では、実施期間の制約から5までの実施に留まっている。

サポートキットの流れ

- ① こども食堂の運営者が発見編に回答、運営の中心になる価値領域を特定
- ② むすびえより上記の価値領域をこども食堂のタイプとして提示（「発見」）、こども食堂運営者が発見したタイプを関係するメンバーに共有
- ③ サポートキット運営ガイドにより、こども食堂が運営チェックガイドを元に運営チェック項目、計測する指標、データ収集方法について決定
- ④ こども食堂が活動を行いながら、特定した指標をもとにデータ収集を準備
- ⑤ こども食堂がデータを収集
- ⑥ 半年毎もしくは1年毎にデータに基づく振り返りを実施
- ⑦ こども食堂として中心となる価値領域に紐づくアウトカムを可視化

付属資料にサポートキット発見編、運営編の詳細を示す。

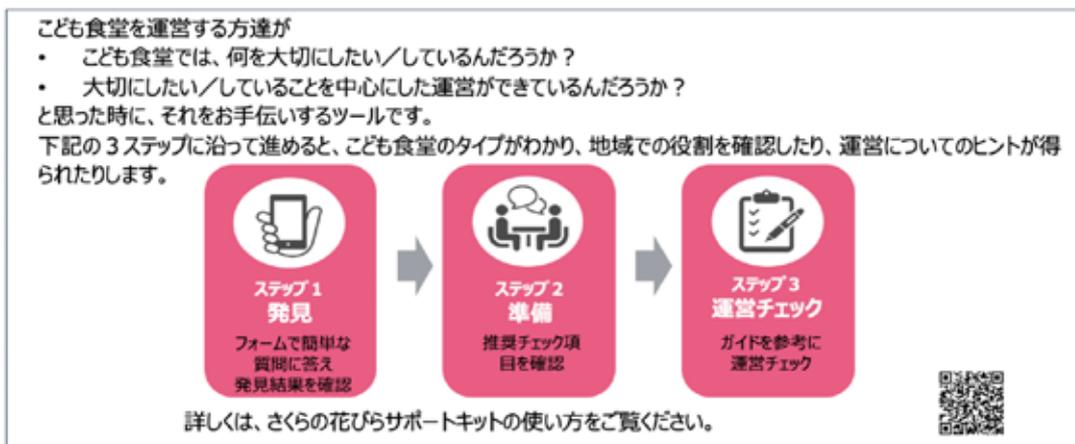


図 17 サポートキットの説明資料の一部

さくらの花びらサポートキット 発見編

さくらの花びらサポートキット「発見編」は、こども食堂を運営するあなたが、「私が運営するこども食堂は、何を大切にしたい/しているんだろうか?」と思ったときに、その「発見」をお手伝いするためのツールです。

所要時間は2-3分程度です。

フォームで簡単な質問に答えると、あなたのこども食堂のタイプがわかり、地域での役割や運営についてのヒントを得られるかもしれません。

また、そのあとの「運営チェック編」では、定期的な振り返りができるツールをご紹介します。

あなたが運営するこども食堂が大切にすることを考える化し、チェックするお手伝いとして、サポートキットをご活用ください。

※さくらの花びらサポートキットは、むすびえ（全国こども食堂支援センター）が、こども食堂の自己発見ツールとして、（株）ブルーマーブルジャパンとの協力で開発しているものです。

※フォームのデータは、下記のリンク先のプライバシーポリシーに基づいて取り扱います。
<https://musubie.org/privacy/>

Googleにログインすると作業内容を保存できます。詳細

地域の理解、関心について

地域の方に今よりこども食堂への理解、関心を持って欲しいと思う? *

とても思う

まあまあ思う

どちらでもない・思わない

戻る 次へ 2/13 ページ フォームをクリア

図 18 サポートキット（発見編）の画面の一部

このように簡単な質問にいくつか答えると、食堂のタイプが診断される。

5 こども食堂の価値を捉える実践結果と考察

第5章では、開発した評価手法(第4章)を、2021-2022年度において全国各地のこども食堂に実際に活用してもらった結果を簡潔に示す。また参考情報として、既存調査結果(全国こども食堂実態調査)からも、こども食堂の価値を読み取ることを試みたので、後述する。

以下に、2021-2022年度の実施概要を示す。詳細は、付属資料を参照のこと。

	2021年度	2022年度
MSC ツールキット	MSC ワークショップの実施 濃い伴走拠点(2拠点):滋賀県、諏訪圏域 薄い伴走拠点(6拠点):青森県、八王子市、和歌山県、堺市、鳥取市、佐賀県	むすびえ全国ツアー等での MSC 実施:岩手県、青森県、埼玉県 *その他に、MSC ファシリテーション研修に参加したむすびえスタッフや地域ネットワーク団体が様々な拠点で実施
サポートキット		地域ネットワーク介入拠点(5拠点):青森県、八王子市、諏訪圏域、滋賀県、佐賀県 立候補拠点:全国から募集してサポートキットのトライアル使用(2団体)

表8 評価手法の活用実績

5-1 MSC 実践による評価結果と考察

MSC ツールキットを用いたワークショップは、2021年度に地域ネットワーク団体の協力を得て5拠点(青森県、八王子市、諏訪圏域、滋賀県、佐賀県)で開催し、2022年度はむすびえが全国ツアーの一環として岩手県、青森県、埼玉県の3拠点の合計8拠点で開催した。

[1] MSC ワークショップの結果の事例

以下、代表的なMSCエピソードの例と価値判断の例を見てみよう。ワークショップ参加のこども食堂運営者がそれぞれMSCエピソードを持ちよって共有し、参加者の投票によりその中のMSCを決定した。

代表的なMSCエピソードの例(佐賀県)

子どもたちがSOSを出してくれるようになった

本当に居場所が必要な子が来るようになった。「ここにいたい!」「明日もくるけんね」と言ってくれる以外にも、自分のことなどを話してくれるようになるほか、「昨日警察が来たんよ」というような、家のなかのプライベートなことも教えてくれるようになった。

価値判断の例(佐賀県)

上記エピソードへの投票理由の例

学校で起こった嫌なこと・愚痴など親に言いづらいことを言える関係になれたことが嬉しい。
パブリックな場所ではなく「お家」だからこそ言えること。それがこども食堂の役割ではないかと思った。

上記の佐賀県の事例のように、全国合計8拠点でMSCワークショップを運用して、そのうち6拠点（青森県、滋賀県、諏訪圏域、佐賀県、岩手県、埼玉県）で「もっとも重大な変化」である”M”（Most）の物語を決めた。この”M”を決める際の価値判断の理由を見てみると、「子どもの視点」や「地域の視点」で価値判断がされていることが共通点として見出された。上記の例では、「子どもにとって嫌なことや愚痴など、プライベートの困りごとも含めて話せる関係性が構築できていること」というような価値判断基準であると言えるだろう。

MSCを用いた評価実践からは、様々な価値領域に該当する多様なエピソードが出てきて、その価値判断の基準も様々であることがわかった。

[2] MSCの結果の量的分析（参考）

2021-2022年度のMSCワークショップで得られたエピソード（MSCエピソード、SCエピソード）の定量分析を実施した。定量分析として、具体的には、エピソード価値の類型化と集計を実施している。エピソードの類型化は、さくらの花びらの5つのバリューを基準にして行なった。5つのバリューに当てはまらないものは「その他」とした。この分類方法について、一般的にはコンテンツ分析（内容分析）のようにゼロベースで読み解きながらコードを振っていくという方法があるが、むすびえおよびさくらプロジェクトではもともとこども食堂の価値の仮説として5つのバリューを示していたため、この分類に則って実施した。エピソードの類型化は、文章の記述のみから判断した。エピソードの分類について明確なクライテリアを設けることは困難であり、ある程度主観的な判断になっていることを前提としたい（各エピソードの分類判断の理由については、別添資料に記載）。価値の類型化は、サポートキットで分類した特化タイプおよび複合タイプのみとして、順位タイプは無しとした。順位タイプを無しとした理由は、MSCエピソード（MSCワークショップの結果出てきたエピソード情報）の記載内容が、順位タイプの定義である「5つのバリューの重みが等分またはそれに近く、かつその中で順位をつけられるような情報」がないためである。

以下に、エピソードの類型化の結果（特化タイプおよび複合タイプ）を示す。2021-2022年度で収集したSCエピソードは合計49件であり、内訳は特化タイプ25件、複合タイプ23件であった。（うち、1件がタイプが判断困難であった）

特化タイプで最も多かったのが「にぎわいづくり、地域活性化」のバリューであり、全体の中で約2割（10件）のエピソードがここに分類された。「にぎわいづくり、地域活性化」の守備範囲は広く、その中には「（こども食堂が）子どもにとっての居場所となった」なども含めている。続いて特化タイプで多かったのが「子育て支援、虐待予防」であり約14%（7件）、「高齢者の健康づくり」約8%（4件）、その他も8%（4件）であった。その他の内容として、例えば「東京で地震があった翌日に食料配布だったが、ハザードマップを渡した。子どもと緊急時のことを話せていない家庭があったが、それが話せてよかったといっていた。」のような防災に関するエピソードなどがあつた。

分類	価値の類型化 <特化タイプ>	集計結果
a	にぎわいづくり、地域活性化	10
b	貧困の連鎖を断ち切る	0
c	子育て支援、虐待予防	7
d	高齢者の健康づくり	4
e	孤食対応	0
f	その他	4
	合計	25

表9 価値の類型化 <特化タイプ>

複合タイプで最も多かったのが「こども見守り・子育て支援タイプ」(貧困の連鎖を断ち切る、子育て支援、虐待予防の複合系)であり、全体の中で約16%(8件)のエピソードがここに分類された。「重大な変化のエピソード」として、このような地域課題の改善・解決に関するバリューが相対的に多く挙げられており、こども食堂運営者の価値観が反映されているように読み取れる。(この内容は、2019年度の調査で明らかになったこども食堂をはじめた経緯・きっかけの内容にも通じるものがある。)その次に「にぎわいづくり・子育て支援タイプ」、「にぎわいづくり・高齢者の健康づくりタイプ」、「子育て支援・困りごと寄り添いタイプ」がそれぞれ4件ずつ(8%)で同列となった。

分類	価値の類型化 <複合タイプ>	集計結果
ab	にぎわいづくり・こども見守りタイプ	0
ac	にぎわいづくり・子育て支援タイプ	4
ad	にぎわいづくり・高齢者の健康づくりタイプ	4
ae	にぎわいづくり・困りごと寄り添いタイプ	0
bc	こども見守り・子育て支援タイプ	8
bd	こども見守り・高齢者の健康づくりタイプ	0
be	こども見守り・困りごと寄り添いタイプ	0
cd	子育て支援・高齢者の健康づくりタイプ	3
ce	子育て支援・困りごと寄り添いタイプ	4
de	高齢者の健康づくり・困りごと寄り添いタイプ	0
	合計	23

表10 価値の類型化 <複合タイプ>

[3] こども食堂における MSC の活用のアイデア

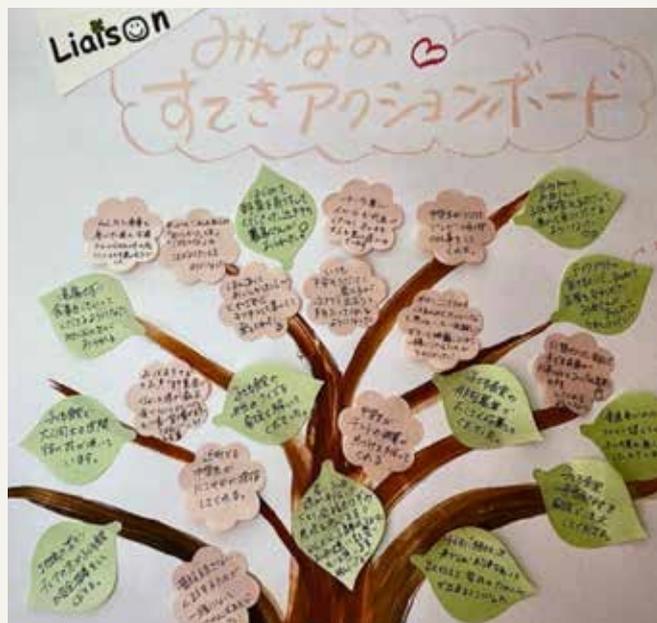
滋賀県のワークショップでは、こども食堂運営者との MSC ワークショップ実施後に、「自らの食堂で、どのように使っていけそうか」という問いかけを受けて、アイデア出しを行なった。以下に、その一例を記載する。また実際のこども食堂（湖北子ども食堂「Liaison（リエゾン）」）での取り組みの例を紹介する。

＜こども食堂における MSC の活用のアイデア＞

MSC エピソードをスタッフに報告することで、自分たちの食堂の良さや強みの再発見につなげる。子ども、親、スタッフや参加者、支援している人々と、エピソードをつくり、まとめて、共有したい。みんなで集まることはないので、「エピソード(物語)ノート」を 1 冊おこうと思う。

湖北子ども食堂「Liaison（リエゾン）」の例

スタッフのモチベーション・キープにより、こども食堂の継続に役立たせたいという目的で関係者の変化のエピソードを集めている。それをスタッフ用のロッカーに貼って、食堂開始前後に書き込めるような工夫をしている。



また参考として、むすびえの全国ツアーで MSC ワークショップを行う様子がメディア掲載された記事を掲載する。MSC ワークショップは、「最も重大な変化の物語」を関係者で共有しあうための方法で、ここで挙げられたエピソードはメディアでも取り上げられやすいため、情報伝達に優れており波及効果があると考えられる。諏訪圏域子ども応援プラットフォームでも、むすびえ支援による MSC ワークショップを行い、「行政担当者にこども食堂の重要性をわかってもらえた」、「その様子を地元新聞 3 誌に取り上げてもらった」などの報告があった。



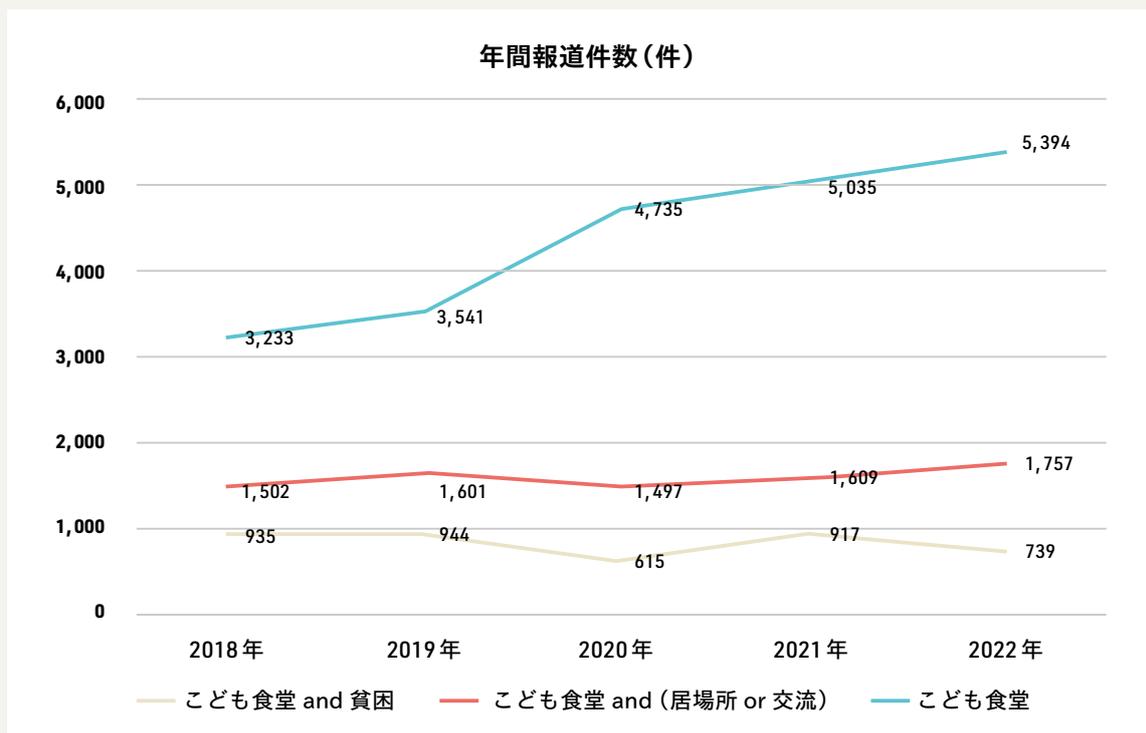
図 19 MSCワークショップを取り上げた新聞記事(2022年8月30日岩手日報)



図 20 諏訪圏域でのMSCワークショップの様子(2023年2月6日)

【参考】こども食堂に関する報道の変化(むすびえ独自調査より)

こども食堂に関する報道は、年々増加している。その中でこども食堂を「貧困」のワードに結びつけた報道は減少している傾向があるが、一方で「居場所」または「交流」のワードに結びつけた報道は増加傾向であることがわかる。このグラフを見ると、メディアでの取り上げられ方にも変化が生まれてきたことがわかるだろう。



5-2 サポートキットによる評価実践の結果と考察

サポートキットは、前述の通りさくらの5つの花びらをベースに、こども食堂の価値を見出し評価する方法として開発した、運営者自らによる自己評価のためのツールである。その大まかな流れは、以下のようになっている。

1. こども食堂の運営者に大切にしていることを質問することで、運営の中心になっている価値領域を特定する。
2. こども食堂が特定した価値を中心にした活動を行う。
3. こども食堂が価値領域に紐づくアウトプット指標のデータを収集する。
4. 中心となる価値領域に紐づくアウトカムを可視化する。

こども食堂の価値を捉える実践として、2021年度から2022年度にかけてサポートキット「発見編」を開発し、運用した。また2022年度はサポートキット「運営編」をモデル実施し、こども食堂の運営者が自ら指標設定をおこない、その指標に基づいてデータ収集に取り組むことを実施した。

[1] 発見編のまとめ

図21に発見編の結果のまとめを示す。2021年度の8つの協力地域と2022年度実施のむすびえ全国ツアー等での呼びかけにより、313件のこども食堂が「発見編」に回答した。それによりこども食堂のタイプ分けを行った。それぞれのタイプの該当団体数は下記の通りとなった。

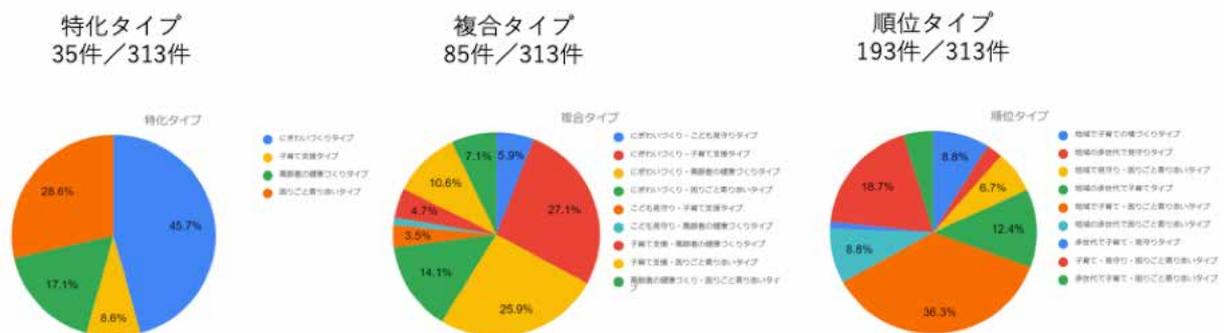
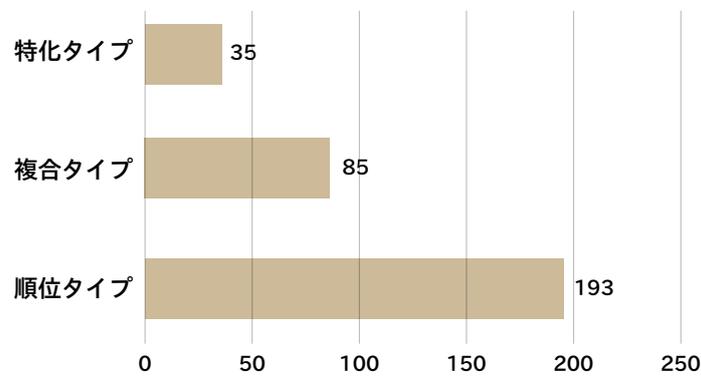


図21 サポートキット発見編 結果まとめ

特化タイプ	こども食堂の運営において大切にしたいと考えている価値が、5つのバリューのうちどれか1つに特化している食堂タイプ
複合タイプ	こども食堂の運営において大切にしたいと考えている価値が、5つのバリューのうち2つのものが複合している食堂タイプ
順位タイプ	こども食堂の運営において大切にしたいと考えている価値が、5つのバリューのうち3つ以上ある食堂タイプ

それによると、順位タイプが過半数以上を占めることとなった。順位タイプの中でも、地域で子育て・困りごと寄り添いタイプが多いことがわかる。こども食堂を実施している中で、子どもや保護者の困りごとに接したり、困難を抱えている様子に直面することで、どのように地域の中であれらが孤立しないか、そのためにどのようにして地域の中でつながりを作っていけるかを考えている食堂は多い。反対に特化タイプが少ないのは、どれかのタイプに特化することで、その要素に当てはまらない状態の人が来にくくなったり、ステイグマ^{※9}からこども食堂に行くことを敬遠するといったことが起こっていることから少なくなっているのではないかと推察される。

※9 「こども食堂は困っている・貧乏な家の子どもが行くところだ」というレッテルを他者が貼ることで周囲から否定的な意味づけをされ、不当な扱いをうけることが実際起こっているとこども食堂運営者の声からわかっている。

[2] 運営編の事例

2022年度地域ネットワーク団体5団体に協力を得て、計31食堂がこのサポートキットを使った運営編の取り組みに参加した他、むすびえが呼びかけた全国のこども食堂の中から2食堂が参加した。以下に、サポートキット実践編に取り組んだ事例を記載する。運営編の評価支援として、2022年度にこのような実践を全国30のこども食堂に対して提供して、サポートキット発見編に基づいて、各食堂が価値タイプに応じた指標を独自設定して、概ね毎月指標に基づいてデータを収集した。

この各地域におけるこども食堂31団体への評価伴走支援によって、各食堂が独自で設定した指標が蓄積されたことになる。

■誰のどんな変化に着目するか

参加した食堂によって設定された指標については、子どもに対しての指標が74件と最も多く、次いで保護者に対する指標(48件)、参加者全員に関する指標(17件)、地域に関する指標(15件)、高齢者に関する指標(7件)とこども食堂の受益者に関して設定されている。他に、運営者・ボランティアに関する指標(14件)も設定されており、5つのバリューにとどまらず、食堂の運営改善のための指標設定も行われた。

■自分たちの活動の価値をデータで確認する

5つのバリューのうち「にぎわいづくり」「子育て支援・虐待防止」「貧困の連鎖を防止する」の3領域に価値を置いている食堂では、子どもに対しては「挨拶」や「会話」を指標として設定し、スタッフやボランティアと挨拶や会話ができるようになったかどうか、参加者同士でどのようなやりとりが行われているかなどを見ようとする傾向にあった。他に「帰宅前の様子」や「参加の度合い」等、普段接している子どもたちの様子に応じた指標が設定されている。保護者に対しては、「笑顔」や「愚痴・悩み事を言えるか」を設定している。スタッフと保護者の関係性構築が重要視され、それにより子育て支援や虐待防止につながると考えられている。

地域	食堂名	タイプ	運営チェック項目の決定		
			誰の変化	チェック項目	理由
滋賀	わつなぎ食堂	地域の多世代で子育てタイプ	子どもたち	帰りがたらない様子	解散したあと、食堂に集合して遊びに行く場面も。延長しているので、ここは直面していない。
八王子	なかよし子ども食堂	にぎわいづくり・子育て支援タイプ	子どもたち	帰宅前の様子	食事の後も子どもたちは帰りがたらないそぶりを見せる子どもたちがいる。
諏訪	Glück (グリュック)	地域で子育て・困りごと寄り添いタイプ	子どもたち	帰宅前の様子	帰宅前の様子が、子どもの変化をとらえやすいため、「帰りたくないということ表現した子どもの数」「すぐに帰った子どもの数」の2つのデータを収集する。
佐賀	居場所そら	子育て・見守り・困りごと寄り添いタイプ	子どもたち	帰宅前の様子	よく来所の子の場合は、家庭や習い事の様子を伺える一助になる

■その地域の実態に合わせた指標選択

実施している地域が違うが同じタイプの食堂の場合、見ようとする指標が同じものもあれば、まったく別のものもあり、その地域特性や食堂運営者の課題意識に応じて指標選択が行われていることがわかる。

タイプ	食堂名	地域	運営チェック項目の決定		
			誰の変化	チェック項目	理由
地域で子育て・困りごと寄り添いタイプ	Glück (グリュック)	諏訪	子どもたち	挨拶や会話	子どもたちは、最初に参加した時には挨拶や会話は少ないが、意識的に運営者から挨拶したり、話しかけていくうちに、徐々に話したり、挨拶したりできるようになる。
地域で子育て・困りごと寄り添いタイプ	新旭駅前ふれあい食堂	滋賀	子どもたち	自ら挨拶をすること	会話をすることが、子どもたちが成長すると思っている。登下校の見守りにも参加しているメンバーが半数近くおり、道端であっても挨拶する。年々成長しており、ご飯たべたら個々に「ありがとう」とおばちゃんに言ってくれる。支援者との関係性もあらかずし、将来につながる。
地域で子育て・困りごと寄り添いタイプ	スマイル甲賀大原っ子	滋賀	子どもたち	自ら挨拶をすること	帰りのタイミングで、子供が、心から「ありがとう」というのか、表面的にしているのか知りたい。習慣になっているか知りたい。

食堂により設定する指標の数は様々であり、一つだけ設定したところもあれば10個以上設定したところもある。また、データ収集の途中で指標を変更したり収集するデータを取捨選択したところもある。

■指標設定によりこども食堂の多様さを確認し合う

全国から参加を呼び掛けて指標設定、データ収集まで取り組んだ食堂に対しては、月1回の相談会を設けたが、そこで見られたのは、他の食堂で設定された指標についての話を聞いたり、データ収集の状況を聴くことで、自食堂の指標設定の参考にしたり、同じタイプであっても着目する指標が違うということに気づけたということであった。地域、全国の中で多様なこども食堂がある「らしい」ということは、それぞれの食堂はわかっているが、その多様さについて指標設定から見えることも今回の取り組みにおいてわかったことである。

以下に、こども食堂におけるサポートキット実施の例を示す。

ちょうじゃこども食堂（運営：労働者協同組合ワークスコープ・センター事業団^{※10}、青森県）

月に1回学習支援活動とセットで実施。コロナ禍前は会食形式だったが、現在はフードパントリー＋学習支援活動というスタイルで実施している。

サポートキットの指標を設定し、データ収集するという方法については、「福祉や教育の現場はケースの話にこだわりすぎる」という担当の工藤さんの実感もあり、「客観的に活動の状況を伝えるためには必要なこと」として取り組まれていた。運営スタッフ2名＋ボランティア（高校生）という実施体制のため、設定した指標のデータを聞き取るのが大変だったとのこと。しかし、聞き取る中で「これに気を配ったらよいのだな」と運営スタッフが大切にしていることがボランティアに伝わったのではないかと感じる場面もあったという。挨拶をする子どもの数を収集することで、成長がみられる、信頼感を得られているかがわかるのではと当初は考えていた。しかし、実際収集してみると、初回参加の子どもたちもきちんと挨拶していることがわかり、別の指標を設定したほうがよいことがわかった。参加者の変化のエピソードを話して「すごいね」と言い合うだけでなく、数字で見える変化を運営者や関係者と一緒に見ることで「よくできている」や「もう少しこうしよう」を見ていけるといいと工藤さんは語った。

※10 さくらプロジェクト参加時は、特定非営利活動法人であった。

ちょうじゃこども食堂		データ収集の状況		
		11月	12月	2月
にぎわいづくり 子育て支援 タイプ	来場時に挨拶をした 子どもの数	初回参加：8人	/	初回参加：8人
		2回目：0		2回目：0
		3回目以上：11人		3回目以上：10人
	発言をした子どもの数	20人		18人
	周囲がネガティブに感じる発言をした 子どもの数	0人		0人
	次回以降の参加に関する前向きな言及を した子どもの数	4人		0人
	子どもの発言内容			牛丼弁当配布に伴う混乱、終盤の黒板 前での状況により、あまり個別の発言 内容を追うことはできなかった。
送迎時にスタッフとの会話（挨拶含む） を行った人数	8人	3人		

[3] サポートキット使用による効果

以下に、2022年度のさくらプロジェクトの各拠点との振り返りの際に抽出したサポートキット使用の気づきや学びをまとめてみたい。

それによると、自分たちの活動を何のために誰のためにおこなっているかを再確認する機会としての「発見編」があり、その後の「運営編」で指標設定することで受益者のどのような変化に着目をするかを意識することができることがわかった。データを読み解く際に、改めて自分たちの活動を再認識し、運営改善やさらに価値を深めたり広めていくことにつながっていることもわかる。

	発見編		運営編	
	①食堂のタイプ診断	②指標を決める	③データを記録する	④データを読み解く
価値について気づいたこと、考えたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・時間をかけて改めて考えることで、大切にしていたことを思い出せた ・自分の想いと同じタイプで安心した ・活動が始まってお弁当作りに追われて、お弁当作ることに置き換えられつつあったがこのために活動してるのね、と目的を確認できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・運営していく上で確かな指標が明確化した ・指標を設定したことで、食堂運営時のスタッフの行動や意識に変化があった（「子どもの笑顔」を指標にした際に、それを促す意識・行動が芽生えた） ・こども食堂を運営する思いと数える数が繋がっておらず、「自分たちの活動はデータでは表せない」と思考停止してしまうところもあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・運営していく上で確かな指標が明確化した ・指標を設定したことで、食堂運営時のスタッフの行動や意識に変化があった（「子どもの笑顔」を指標にした際に、それを促す意識・行動が芽生えた） ・こども食堂を運営する思いと数える数が繋がっておらず、「自分たちの活動はデータでは表せない」と思考停止してしまうところもあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・データを読み解く「流れ」を体得できたように思う。価値を再確認できた ・毎月、毎年の積み重ねたデータを再確認することが大事 ・3ヶ月程度のデータでは変化もなく、外部要因（大雪警報で中止とか）の影響を受けた数字もあり、この短い期間のデータだけでは価値判断までには至らなかった。 ・振り返りをすることによって、自分たちのふるまいが、思いやりが感じられない対応になってしまったことにも気づき、子どもたちに接して、分かち合い・思いやりを持って接するということを新たに確認した。

表11 サポートキット実施による気づきや学び

地域ネットワーク介在拠点では参加したこども食堂のモチベーションやスキルが様々であった。立候補拠点では、指標設定をして収集したデータをどのように使うかについて明確な目的をもっているところが多く、データ収集に対する意欲を比較検討できた。サポートキットの活用には各こども食堂の価値を「誰に」「どのように」「何のために」伝えるかを念頭に置きながら指標設定およびデータ収集のサポートをすることが求められるだろう。

[4] MSCツールキットとサポートキットの関係性の考察(参考)

MSCツールキットとサポートキットはそれぞれ異なる評価手法であり、直接的な関係性はない。しかしさくらプロジェクトではこれらの2つのアプローチを用いてこども食堂の価値を両面から評価を行なった。そのためあらためてそれぞれの特徴を整理して、その関係性を考察したい。

以下に、MSCツールキットとサポートキットの特徴の整理を示す。

MSC ツールキット	サポートキット
対象者の変化に関するエピソードを扱う定性評価	指標に基づく定量・定性評価が中心
アウトカムは予期せぬものが多い	設定した指標により意図したアウトプットやアウトカムの情報を集める
得られる情報は過去～現在にかけてのアウトカムが中心	指標で取得する情報は、現在～未来にかけてのアウトカム、アウトプットが中心

MSCは、こども食堂運営者・関係者が「もっとも重大な変化の物語」を挙げていき、価値づけを行う。他の運営者のエピソードを聞く中で共感の連鎖が生まれて、さらに自身が持つエピソードが芽づる式に想起されるという性質があるだろう。その特徴は、思いがけないエピソードとの出会い、創発、共創などであり、時間軸は現在から過去に遡って価値の引き出しが行われる。抽出・合意された最も重大な変化のエピソードは、こども食堂で生まれる価値に関する情報を具体的にイキイキと伝えることができる。

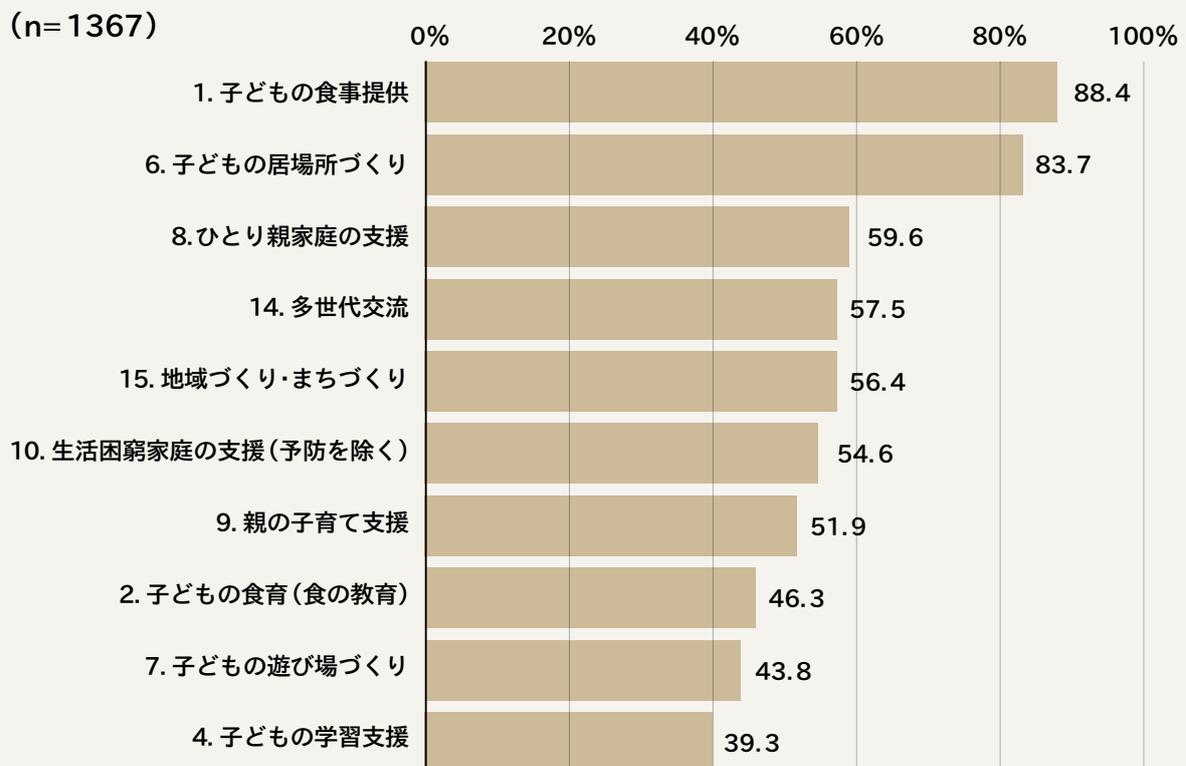
その一方でサポートキットは、まず食堂タイプを診断する。次に食堂タイプごとの推奨指標を踏まえて自らの食堂の運営チェックの指標を設定する。その上で定期的(毎月など)に変化や現状に関するデータを取り、一定期間経過後に収集したデータの解釈と価値判断を行うという進め方である。特徴として、こども食堂の活動で日常的に生まれている情報を網羅的に把握しやすいことである。運営者は事前に指標を設定すること、データが一定程度蓄積されて、はじめて価値に気がつくという性質がある。この過程によって得られたデータ(その多くは数字)は、こども食堂の価値を対外的にわかりやすく説明していくことに有用となる。

MSCツールキットとサポートキットの関係性は、サポートキットが日常的な活動の結果を中心に記録していることに対して、MSCでは予期しない変化のエピソードを抽出する。今後、2つのツールを併用する食堂においては、MSCで語られたような「重大な変化の物語」がなぜ生まれたのか、その要因を分析することにサポートキットのデータが活用できるかもしれない。

【参考】こども食堂の主な目的(むすびえ独自調査より)

こども食堂の主な目的の調査結果として、1番多かったのは「子どもの食事提供」で9割近くあったが、続いて「子どもの居場所づくり」が約84%と高い結果となっている。5つのバリューの中心部にある「多世代交流」や「地域づくり・まちづくり」はそれぞれ約58%、56%と半数以上が主な目的として掲げていることがわかった。一方で、課題解決の価値である「ひとり親家庭の支援」(5つのバリューの花びらでは、子育て支援や貧困対策に対応)は約60%、「生活困窮家庭の支援」(5つのバリューの花びらでは、貧困対策に対応)は約55%、「親の子育て支援」(5つのバリューの花びらでは、子育て支援に対応)は約52%と、半数以上であった。

詳細は、第1回全国こども食堂実態調査(<https://musubie.org/news/4881/>)を参照のこと。



5 -3 全国調査の結果と考察

[1] こども食堂の価値は名前に現れる

ここまでは、開発した2つの評価手法により、こども食堂の価値の多様性を見てきた。そのような多様性は、他にこども食堂のどのようなところに現れるのだろうか。さくらプロジェクトにおいては、例えば2021年度に滋賀県のこども食堂を集めて実施した作戦会議で、こども食堂名にどのように価値が表れているのかが話題となった。このような背景も含めて、こども食堂の名前から読み取れることがあるのかを検討するために、第1回全国こども食堂実態調査に回答のあった1,383団体の名称からこども食堂の価値を読み解いた。回答団体のうち、こども食堂の名称に回答があったのは1,352団体であり、「こども」「子ども」「子供」「キッズ」という言葉を含むこども食堂の名称は662団体、49.4%と約半数であった。

残り約半数のこども食堂の名称に含まれる言葉が多かったのが右記の通り、「みんな」「地域」といった多様な人を指す言葉を含んでいる団体が多い、という結果になった。この結果は、「こども食堂の活動を多様な人に届けたい」、「こどもだけでなく地域みんなの居場所でありたい」などという運営者の意図が名前にも現れていると言えるだろう。

含まれる言葉	団体数
みんな	86
地域	37
わいわい	25
スマイル	21
なかよし	17
コミュニティ	14
わくわく	12
にこにこ	10

表 12
こども食堂の名前の集計(多様な人を示す例)

【参考】こども食堂名と枕詞から考える価値について

2021年度滋賀県で実施したワークショップでは、複数のこども食堂の運営者に、こども食堂につける「価値に関する枕詞」を考えてもらった。その上で、食堂名をつけた理由や運営の際に大切にしていることを言語化してもらった。

[子どもによりそうみんなの食堂 晴嵐みんなの食堂の場合]

枕詞と食堂名に込められた思いから特定した価値と、そこからわかるタイプは下記の通り。「地域で子育て・困りごと寄り添いタイプ」

特定した価値

- 子どもが仲間と遊びこむ時間、バリエーションが増える
- 子ども自身にとって、(子ども食堂が)必要な場所になる
- 子どものしんどい状況に気づく
- 学校や行政と連携することで、いろんな眼差しの中で見守られる

【ひとりぼっちを防ぐ 湖北子ども食堂「Liaison (リエゾン)」の場合】

枕詞と食堂名に込められた思いから特定した価値と、そこからわかるタイプは下記の通り。
「地域で子育ての場づくりタイプ」

特定した価値

- 子ども食堂に関わる地域の人が増える（ひとりぼっちにならない、つながり・生きがいがづくり）
- 保護者の子育ての負担、不安、悩みの解消
- 孤食からくる困りごとを把握・改善する

これらの事例をみてわかる通り、こども食堂は子どものためだけに開催しているのでもなく、こどもの貧困のためだけに開催しているのでもない。そのことがこども食堂の名称にも現れている。

【2】 こども食堂の主な目的に現れるこども食堂の価値

実態調査に回答のあった1,383団体の「こども食堂の主な目的」の選択肢をさくらの5つの花びらと対応づけた。

5つの花びら	こども食堂の目的の選択肢
a にぎわいづくり・地域活性化	14. 多世代交流 15. 地域づくり・まちづくり 16. 従来の地域団体活動の活性化（自治会や子ども会など） 17. 防災拠点 18. 伝統行事の伝承 19. 地域の特産物振興 21. 運営団体の地域貢献 その他
b 孤食対応	1. 子どもの食事提供 2. 子どもの食育（食の教育）
c 子育て支援・虐待予防	3. 子どもの生活習慣の習得 4. 子どもの学習支援 5. 子どもの見守り支援（虐待防止） 6. 子どもの居場所づくり 7. 子どもの遊び場づくり 9. 親の子育て支援
d 高齢者の健康づくり	12. 高齢者や障害者等の支援（生きがいがづくり等） 13. 介護予防
e 貧困の連鎖を断ち切る	8. ひとり親家庭の支援 10. 生活困窮家庭の支援（予防を除く） 11. 生活困窮の予防

※「20. 食品ロス削減」は5つの花びらに分類されていない

表13 5つの花びらとこども食堂の目的の選択肢の対応づけ

対応づけによるタイプ分け方法

[前提] ●さくらの花びらサポートキットのタイプを決める「発見編」の設問数と実態調査のアンケートの選択肢の数に差がある。そのため、割合を算出してタイプを決めることとする。

- ・発見編の設問数 各花びら毎に3項目
- ・実態調査の設問数 a にぎわいづくり・地域活性化: 7項目 / b 孤食対応: 2項目 / c 子育て支援・虐待予防: 6項目 / d 高齢者の健康づくり: 2項目 / e 貧困の連鎖を断ち切る: 3項目

タイプ分けの方法

- 実態調査のアンケートで「こども食堂の主な目的」の選択肢のうち、選んだ項目は1点、選んでない項目は0点と点数をつける。
- 実態調査のアンケートの点数を各花びら毎に集計。
- さくらの花びらサポートキットの発見編の考え方を応用し、各花びら毎の集計点数が0点より多い花びらを使って、25のタイプに分類。(前述のさくらの花びらサポートキット発見編の説明参照。)
- ただし、「20. 食品ロス削減」のみ、5つの花びらに当てはまらないため本レポートの対象データからは除外とする。食品ロス削減を選んだのは487団体。

対応づけによるタイプ分け結果

- 実態調査に回答した1,383団体のうち、25タイプに分けることができたのは931団体分。
- ただし、5つの花びらの4つ以上と対応づいた団体が、452団体分あった。(全体の32.7%)。さくらの花びらサポートキットでのタイプの出し方は、5つの花びらの4つ以上と対応づいている場合は、上位3つを特定して、その3つを順位タイプとしている。
- この考え方を応用すると、下記の表に掲載された順位タイプ564団体以外に、花びらを4つ以上と対応づいている452団体も順位タイプに含まれ、合計で1,016団体、全体の73.5%が順位タイプとなる。
- このように、実態調査の「こども食堂の主な目的」からも、こども食堂の価値が実に多様であることが伺える。

	特化タイプ	団体数	タイプ内の割合
a	にぎわいづくりタイプ	22	21%
b	こども見守りタイプ	1	1%
c	子育て支援タイプ	60	57%
d	高齢者の健康づくりタイプ	2	2%
e	困りごと寄り添いタイプ	20	19%
	特化タイプ合計	105	

	複合タイプ	団体数	タイプ内の割合
ab	にぎわいづくり・こども見守りタイプ	6	2%
ac	にぎわいづくり・子育て支援タイプ	123	47%
ad	にぎわいづくり・高齢者の健康づくりタイプ	6	2%
ae	にぎわいづくり・困りごと寄り添いタイプ	8	3%
bc	こども見守り・子育て支援タイプ	24	9%
bd	こども見守り・高齢者の健康づくりタイプ	3	1%
be	こども見守り・困りごと寄り添いタイプ	3	1%
cd	子育て支援・高齢者の健康づくりタイプ	5	2%
ce	子育て支援・困りごと寄り添いタイプ	84	32%
de	高齢者の健康づくり・困りごと寄り添いタイプ	0	0%
	複合タイプ合計	262	

	順位タイプ	団体数	タイプ内の割合
abc	地域で子育ての場づくりタイプ	70	12%
abd	地域の多世代で見守りタイプ	1	0%
abe	地域で見守り・困りごと寄り添いタイプ	4	1%
acd	地域の多世代で子育てタイプ	43	8%
ace	地域で子育て・困りごと寄り添いタイプ	186	33%
ade	地域の多世代で困りごと寄り添いタイプ	186	33%
bcd	多世代で子育て・見守りタイプ	4	1%
bce	子育て・見守り・困りごと寄り添いタイプ	48	9%
bde	多世代で見守り・困りごと寄り添いタイプ	0	0%
cde	多世代で子育て・困りごと寄り添いタイプ	22	4%
	順位タイプ合計	564	

表14 タイプごとの分類結果

6 価値研究会

サポートキットとMSCツールキットによる実証は、こども食堂に関わる中心的な関係者（食堂運営者、地域ネットワーク団体）による自己評価の側面が強いものである。一方でこども食堂の価値を対外的にもわかりやすく伝えていくことが、こども食堂が普及していく上で欠かせない。そのため、こども食堂に関わる中心的な関係者（食堂運営者、地域ネットワーク団体）が体感・実感している価値と、こども食堂に関心がある外の立場の企業や政府、その他のアクターがこども食堂の価値をどのように価値を捉えているのか、それらの共通点や違いを明らかにすることを試みるため、ステークホルダー参加型でこども食堂の価値を考える価値研究会を2022年度に企画・開催した。価値研究会では、こども食堂の価値を考える対象を企業や政府などにも広げて、より広い視点で「こども食堂が生み出す価値」に関する討議を行い、こども食堂に関わる様々な関係者が考える価値のあり様について考察を深めていった。

実施概要

回数	日時	内容
第1回	2023年1月19日（木） 10時～12時	こども食堂で生まれたMSCエピソードに触れてもらい、ステークホルダーの立場別で「こども食堂」の意義や価値を議論する
第2回	2023年3月20日（月） 10時～12時	さくらの花びらの5つのバリュー（価値）やサポートキット発見編の結果を見てもらい、ステークホルダー立場別で「こども食堂」の意義や価値について、さらなる議論を進める（別の立場のステークホルダーのオブザーブあり）

表 15 価値研究会の概要

立場 A : こども食堂		
氏名	所属	所在地
白崎 田鶴子	わつなぎ食堂	滋賀
八幡 カオリ	コミュ・きっちゃん天香	諏訪圏域
入江 航	ここてらす	佐賀
橋本 佳子	いっぽん松こども食堂 Peekabo(っ)o (ピカブー)	愛知
坂本 歩	ほいっぶ食堂	八王子
工藤 克祥	(労協) ワーカーズコープ・センター事業団 ちょうじゃこども食堂	青森
立場 B : 地域ネットワーク団体		
木村 かほり	諏訪圏域子ども応援プラットフォーム	諏訪圏域
岩本 紀子	(社福) 滋賀県社会福祉協議会	滋賀
高山 哲也	(一社) さが・こども未来応援プロジェクト実行委員会	佐賀
川久保 美紀子	フードバンク八王子	佐賀
葛西 裕美	(社福) 青森県社会福祉協議会 社会貢献活動推進室	青森
須藤 亜樹子	(社福) 青森県社会福祉協議会 社会貢献活動推進室	青森
立場 C : 自治会長		
小西 由美子	吉身東町自治会長 子ども食堂あおぞら 子ども食堂ひがしっこ	滋賀
黒木 淳子	希望ヶ丘東自治会長 宮崎市のコーディネーター	宮崎
立場 D : 支援企業		
松田 幸大	三菱商事 (株)	その他
根岸 真智子	三菱商事 (株)	その他
大豆生田 清志	(公財) 浦上食品・食文化振興財団	その他
鶴見 久美子	イオン (株)	その他
上野 晶子	イオン (株)	その他
大澤 寛之	(株) ファミリーマート	その他
立場 E : その他 (政府、学識者、NPO など)		
山口 正行	内閣官房 こども家庭庁設立準備室	その他
榊原 毅	内閣官房孤独孤立対策担当審議官	その他
宮國 康弘	日本福祉大学	その他
小柴 徳明	(社福) 黒部市社会福祉協議会	その他
渡辺 ゆりか	(一社) 草の根ささえあいプロジェクト	その他

表 16 価値研究会の参加者

価値研究会の議論のまとめ

価値研究会では、これまでの実証の結果の意味合いが補完されるとともに、以下のようなあらたな視点が得られた。以下に2回分の研究会の議論の内容をまとめる。

さくらの5つの花びらではなく、中心部(本質的価値/内在的価値)への着目

- 特に食堂運営者から、「運営当事者は、価値があるからやっているとは思っていない。」「地域にこども食堂があること自体に意味がある。」など、「こども食堂という”場そのもの”としての価値」についての発言が多くあった。これは、5つの花びらではなく、2章で紹介した中心部の価値に位置づく見解と言える。
- 花びらの中心にある「多世代交流」は、2019年度調査のまとめのように5つの花びらや類似の課題解決を可能にする要件(enabler)であり、内在的価値(intrinsic value)であるという考察を後押しする意見が多く得られた。
- 「場そのものとしての価値」については、目的的でない(特定の課題を解決するために集まっているわけではない)つながり方ができることというコメントが地域ネットワーク団体より挙げられた。「地域の〇〇のために！」と掲げなくても集まった人たちが、地域の子どもの軸にして、こども食堂利用者同士が勝手に知り合い、つながっていく。これは挨拶すら気軽にできなくなってしまっている地域の現状にとって、大いに貢献しうる内容である。

さくらの花びらの中心部の「多世代交流」の重要性

- こども食堂に欠かせないこととして「多世代交流」が挙げられた。多世代であることを指向しているのに、それを許さない現代社会の中で、多世代交流を実現する場としてこども食堂があるという認識が語られた。
- この多世代交流については、場に多世代が集うことで何かが生まれるという感覚があるようだ。わざわざ行ってこの人と話す、ではなくて、たまたまである人と出会って、食事や遊びをすることで、自分が関わらなかつた人とつながれる。中学生と高齢者、子どもや大学生やお母さんたち同士がおしゃべりをする場がある。こども食堂での食事の時間にはそのような多様な出会いがあったと思うと振り返る運営者もいた。
- この多世代交流については、自治会活動の機能を補完する可能性についても語られた。自治会活動への参加者が高齢世代中心と年代が偏っている中で、こども食堂には幅広い世代の人たちが関わっている。これによって、自治会活動の機能を補完できる可能性についても語られた。

こども食堂の中心に子どもがいること(子どもが核となるつながりの創出)

- こども食堂という活動やコンセプトアート、食堂名などに「子ども」が欠かせないという発言が多く見られた。「子ども」のキーワードがあると、共感の輪が広がりやすくなり、実際の応援も協力も参加も広がるという。
- 子どもの未来は、地域にとっての未来である。子どもの成長のためにも地域のつながりが大切であること、その際に子どもがつながりの軸になることが強調されていた。
- 地域の中のこども食堂という視点で捉え直すと、多くの自治会で高齢化が進み地域の担い手が少なくなっていく中で、このようなこども食堂が地域に果たす役割が求められていると言えるだろう。

こども食堂の懐の深さ、女性(特に中高年女性)の活躍の場としてのこども食堂

- こども食堂は、子どもだけではなく、地域のボランティアや高齢者、地域の人「行こうかな」「なにかできることがあるか」「必要なものはないか」という自発的な行動を受け入れることができる懐の深さ(キャパシティ)があるという認識が話されていた。
- こども食堂は、女性(特に中高年女性)の活躍の場である。これまで地域の中(自治会も含む)で役割や活躍の場が少なかった女性(その多くが子育てがひと段落した年代)が、自らの得意(料理やおせっかいなど)を存分に自由に発揮できるこども食堂の器は、イノベティブであるとの認識が複数名から語られていた。
- 地域自治との関係では従来の地域の婦人会というものがあるが、婦人会は衰退化の一途をたどっているし、婦人会は男性優位の社会で「下」に見られていたという現実がある。

こども食堂の多機能さ

- こども食堂が多くの機能を持つことについては、特に自治会長の視点から話が出てきた。例えば、「食べる、掃除、会って話をする」という行為は地域のつながりをもう一段二段深くすることにつながる。
- 多機能の一例として、町(自治会)の視点では防災・防犯への好影響がある。例えばこども食堂で防犯、防災、地域生活のマナー(ゴミ分別という環境教育)の取り組みをやっているケースも紹介された。こども食堂が活発だと顔が見えているから自治会活動も活発にできる。
- この多機能な価値については、さくらプロジェクトの5つのバリュー以上の可能性を秘めていることがわかった。これは全国調査結果やMSCの分析でも示された内容と同様である。

「意図的な価値」と「結果としての価値」

- この2者については、例えば、5つのバリューのうち「高齢者の健康づくり」を意図して始めたところは少ないが、結果として果たしているところがあると考えられる。駄菓子屋も結果としてこどもの居場所になったということもその一例。「意図して始めたところと結果としてそうなったところが見えるといい。」とのコメントもあった。
- 「結果としての価値」は多様であると想定されるが、事後的な振り返りによって認識されるという特徴が、価値研究会での発言からも裏付けられた。上述のように、「意図的な価値」はサポートキットで把握できるが、「結果としての価値(意図しなかった価値)」についてはMSCツールキットを使用することが向いていると考える。

こども食堂の内側と外側のステークホルダーからみた視点の違い

- こども食堂の内側の関係者(地域ネットワーク団体)からは、「こども食堂=貧困の子どもではないといつつ、刺さるエピソードはしんどい子になる。その難しさを感じる。」「コミュニティづくりの話が企業が応援するか?という難しい。」のコメントにあるように、こども食堂運営者側に、企業は地域づくりに関心がない、貧困対策などの特定課題に対して支援を行うという印象や実感が見られた。
- 一方で支援企業からは、「地域創成への貢献こそが本業につながることであり」、「地域づくりに積極的に関わりたいと思っている企業にとって、その地域の状況を知ることができる。」など、こども食堂は、地域づくりにとって重要な存在の一つであるという共通認識が聞かれた。
- 本研究への参加企業は、特に地域づくりへの意識が高い企業であると想像できるが、このように、立場別に分かれて議論を行ったことにより、ステークホルダーごとの視点の違いが見られたことは興味深かった。

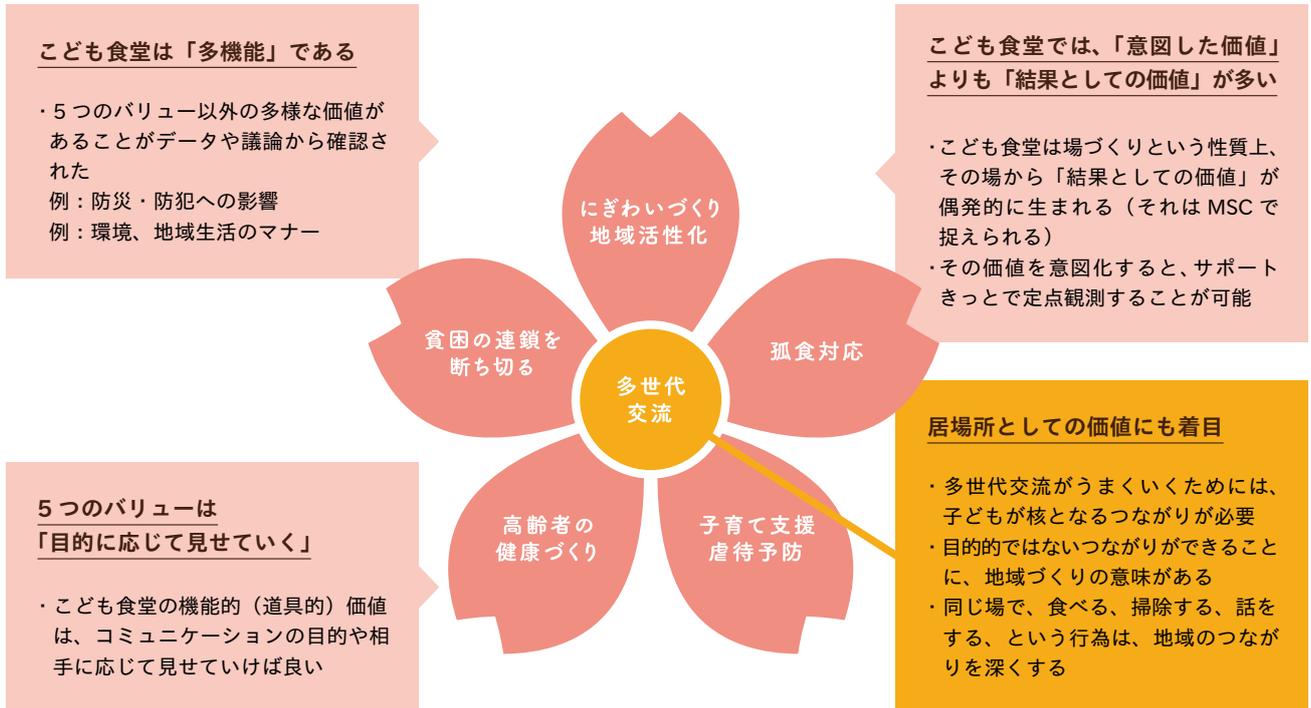


図 22 5つのバリューに対応させた価値研究会の議論のまとめ

7 まとめ・考察

[1] 5つのバリューのデータによる裏付け

当初からこども食堂はさくらの花びらで表現される多様な価値が創出されているという仮説（5つのバリュー）があったが、本プロジェクトの実施により、それが一定程度裏付けられた。

MSCについては、5章で述べたように、5つのバリューに対応したエピソードが出されている。SC（最も重要な「M」がついていないものも含め）のエピソード49件のうち、特化タイプでは「にぎわいづくり・地域活性化」、複合タイプでは、「貧困の連鎖を断ち切る」「子育て支援」「虐待予防」の複合系のエピソードの数が最も多い結果になっている。同時に、特化タイプでは「子育て支援」や「虐待予防」、「孤食対応」のSCエピソードは見られないが、複合タイプではこれらに相当するエピソードは見られる。

一方、サポートキットの運用においては、これも5章で示したように、「発見編」（タイプ別診断）において、こども食堂運営者・関係者がどのようなこども食堂を目指しているかを可視化している。これは、こども食堂の運営の結果表出している価値という整理はできないが、目指す価値にしたがって運営が進み、「運営編」（指標設定、指標に基づいたデータ収集・分析）での裏付けが今後進んでいくことが予期されるものである。それによると、特化タイプ、複合タイプ、順位タイプにおいて、5つの花びらが満遍なく網羅されているのがわかる。

したがって、5つのバリューは、こども食堂の価値を考える上での今後も指針となりうる。これは、特にサポートキットの実証から言える。具体的には、サポートキットの発見編で、5つのバリューに紐づけたタイプ診断を行なったが、発見編を活用したこども食堂運営者からは、「診断が当たっている」という実感の声が多く聞かれた。一方で運営編による指標設定フェーズでは、同じタイプや同じバリューを意識する食堂同士でも、設定した指標は異なることが多かった。このことが意味することは、食堂運営者が何を大切にしたいかというおおまかな方向性は同じでも、こだわりたいことの詳細は食堂によって異なる、ということであろう。多様な食堂がある中で、このことはあらかじめ想像していたが、基本としての5つのバリューをこども食堂の価値を考える上での指針として活用し続けていくことに意味があると考えられる。

[2] 5つのバリューの中心から見えてくる「地域の居場所としてのこども食堂」

同時に、本プロジェクトの実施により、こども食堂の価値はさくらの5つの花びら（バリュー）にとどまらないこともわかってきた。まず、5つのバリュー以外の価値として、「地域課題を地域住民が発見すること」、「地域の防犯・防災に役立つこと」、「女性の活躍の場になる」などが、MSCやサポートキット、価値研究会の議論などで挙げられている。実際、こども食堂の価値の種類は5つのバリューにとどまらず、こども食堂の多様性（運営者の地域に対する問題意識の数）だけ、同じように多様な価値が生まれているという見方ができるのではないかと。その価値の多様性はサポートキットのタイプ診断や指標の違いに現れている（同じアウトカムでも、指標の詳細が異なる）し、何一つとして同じものがないであろうMSCのエピソードにも現れている。

さらに、5つのバリューの中心部に位置する「多世代交流」や「地域の居場所としてのこども食堂」についても注目しておく必要がある。これらは、2章で提示した中心を「道具的価値」と考えるか「内在的価値／本質的価値」と考えるかの考察に対する一つの回答になるものだが、本プロジェクトを通して、この後者の見解が多く聞かれたことは心に留めておく必要がある。つまり5つのバリューを生み出すことに価値があるだけでなく、こども食堂という場そのものに価値があるという考え方である。こども食堂という場に多世代が集まりそこで様々な人たちと交流できること、利用者同士が知り合い、自然とつながっていくこと。地域での顔見知りが増えることによって、様々な地域課題の発生予防にもつながるし、何か起こってしまったあとにはサポートし合えるようになる場所としてこども食堂が機能しているし、その機能の今後の展開を考えていく必要があるだろう。

関連のポイントとして、価値研究会を実施した学びとして、「意図的な価値」と「結果としての価値」の区別があった。「意図的な価値」はこども食堂運営者があらかじめ意図した価値である。その一方で「結果としての価値」は、食堂運営者としては意図しなかったが、何らかの変化が結果として現れた、意図せずに成果が生まれるということが往々にしてあるという。そして、こども食堂には、「結果としての価値」が多く生まれているという見解が多く聞かれた。このことは、こども食堂が地域の居場所として内在的価値／本質的価値をもつものであり、そこからさまざまな価値(結果としての価値)が派生しうるものだという事を意味している。

また、本プロジェクトの実践により、こども食堂の価値は複合的に考えるという学びが得られたことは強調しておきたい。具体的には、さくらの花びらのそれぞれのバリューを複合的に考えること、5つのバリュー以外の価値も考えること、そして5つのバリューだけでなく中心にある「多世代交流」や「居場所」という内在的価値も取り扱うことなどである。当初の仮説では、5つのバリューを生み出す源泉が多世代交流であったが、本プロジェクトの実践により多世代交流が実現する「居場所そのもの」が価値の源泉であり、5つの花びら＋その他の価値が結果として出てくるというように、価値の源泉をつきつめられたこと、また居場所そのものが存在することにより生まれる結果としての価値がより明確になったと言えるだろう。そして5章で見たように、5つのバリューについて、サポートキットの開発の際に、特化タイプだけでなく、複合タイプ・順位タイプも考慮して設計を行なったが、実際のデータとしても特化タイプよりも複合タイプ・順位タイプが多く現れており、こども食堂の価値を複合的に取り扱うべきであるという教訓が得られた。

以上で、こども食堂の価値に関するまとめと若干の考察を行い、こども食堂が生み出す価値が5つのバリューに概ね集約可能なこと、「多世代交流」や「居場所」という内在的価値があること、それらを捉えるためのツールの開発や実証結果を示してきたが、これらの集計結果をもって、「全国のこども食堂が生み出す価値の総体」として示すことは困難であろうことを付け加えておきたい。なぜならば、「多世代交流」や「居場所」での活動によって取り組むべき社会課題は多様であり、今後も、あらたに出現する課題が可視化される場としてこども食堂が存在する可能性が高いからである。新たな課題が出現すれば、それに対応する取り組みや施策も生まれていくだろうが、それらが始まる場所、気づきや学びの場所としてこども食堂が存在するのであれば、こども食堂が生み出す価値の総体は、これからも変化しつづけていくものであると考えた方が、より現実的と考える。

8 今後に向けて ～こども食堂の価値の扱いをさらに発展させるために～

8-1 ボトムアップ型の価値の創出、収集、整理の仕組みづくりに向けて

7章で述べたように、価値研究会で挙げられた「意図的な価値」と「結果としての価値」の整理でいうと、こども食堂は後者の側面が強いものであることがわかってきている。こども食堂、地域ネットワーク団体への評価伴走の際に、「5つのバリューのためにやっているわけではなく、やった結果、この5つも出てきている」「5つのバリューは、支援している側の目線が強い印象がある。子ども自身や当事者目線でバリューではない」「運営当事者は、価値があるからやっているとは思っていない」、「地域にこども食堂があること自体に意味がある」などのコメントが寄せられた。

このようなコメントから伝わってくる、こども食堂の「現場意識」は大切なものである。本プロジェクトにより、地域ネットワーク団体に協力してもらい、地域単位でのエピソード抽出やサポートキットを用いた個々の食堂への評価伴走支援を行ったが、その一つの成果は現場目線で構築した指標セットやMSCを実施するための仕組みづくりを行ったことである。これにより、今後にわたってこども食堂運営者や関係者の主体的関与により、現場目線でこども食堂の価値に関するデータを蓄積していける。そのような、ボトムアップ型の仕組みで蓄積されたデータが個別の食堂や地域、全国レベルでの分析によって生み出す学びや教訓はとてつもなく大きい。加えて、これらはこども食堂の運営に関する学びや教訓にとどまらず、地域課題の変遷やそれについての現場の肌感覚と実感値を示すものとなり、地域課題解決に向けた行政施策や公共政策的観点からも大きな財産となるものである。

8-2 MSCの発展的な展開について

MSCについて、2021-2022年度の実践を踏まえると、以下のような方向性で発展させていける可能性があると考えられる。

[1] MSCの全国展開

すでにむすびえが2022年度から開始した全国ツアーにおいて各拠点でMSCワークショップを行ってデータを蓄積しているが、その価値づけを全国規模で行うことが考えられる。例えば「MSC全国大会」のような形で、全国のこども食堂に最も重大な変化のエピソードを持ち寄ってもらい、全体の中で価値づけをしていくことが考えられる。すでに全国ツアーで取得しているデータを活用するということも考えられるだろう。全国規模のMSC実施には、こども食堂の関係者の多さから参加者の選定などに十分な配慮が必要であるが、これができるとMSCの本来の持ち味である価値の合意形成や価値基準の明確化がされるし、国内の関係者(政府や行政なども含めて)にこども食堂の価値を伝えていく上で大きな意味を持つ素材となるであろう。

[2] MSCレポート・フォーマットの作成と提供

地域単位や食堂単位でMSCワークショップを行っても、それがそのままやりっぱなしになってしまうと評価結果が活用されないことになってしまうことへの懸念がある。そのため地域ネットワーク団体やこども食堂でMSCワークショップの結果を効果的に活用してもらうために、① MSCステートメント(MSCエピソードを記載する文章の意味)の詳細記述、② MSCのレポート・フォーマットを作成し提供することを提案したい。

①はワークショップで挙げられたエピソード（多くは短文）をA4一枚程度のボリュームで起承転結がわかるような情報量で書き起こすというものである。すべてのエピソードに対しておこなうのは手間がかかるため、MSCのみに限定して行うことを提案したい。②はMSCワークショップの結果を評価レポートとしてまとめるためのフォーマットの提供である。①も②もMSCワークショップを実施後、そこで得られたデータ（変化のエピソード）や価値判断の結果をわかりやすくまとめることで、対外的に効果的に伝えられるようにするものである。それを行うことでこども食堂の価値をレポートとして示すことができるし、こども食堂運営者のエンパワメントにもつながるであろう。

[3] MSCデータの定量化・二次分析

さくらプロジェクトや全国ツアーによって蓄積されているMSCエピソード（SCエピソード）について、データを定量化したり、二次分析を行うことが考えられる。ワークショップで簡易的にMSCをおこなう都合上、以下に示す②についてはすぐには困難であるが、より詳細の情報を集めるような仕組み（例として、前述したMSCレポート・フォーマットの作成）を構築しておくことで二次分析まで可能となるであろう。

①定量化:一定期間・範囲の全てのエピソードをまとめて分析し、どのような種類の「変化」がどのような割合で含まれているかを明らかにする。これにより、5つのバリューごとの変化がどのような割合で起こっているか、また変化の対象者別の分析（「こどもの変化」「保護者の変化」「ボランティア・スタッフの変化」、「地域全体の変化」）や、それぞれの関係性の変化などに仕分け・分類ができるであろう。このイメージは、すでに「5-1(2) MSCの量的分析」の項目で例を示している。

②二次分析:①でわかった様々な「変化」の相互関係や、場所の違いや時間による推移を分析する。これによって、さまざまな変化の相互関係や時系列の内容がわかる可能性がある。例えば、「ある変化」が「別の変化」の要因になっていること。これにより、現場で何が起きているか、「変化」の全体像が見える。「変化」の背景・要因が明らかになって活動を改善していく教訓を学ぶことができる可能性がある。MSCでは「意図した変化」と「意図しない変化」の両方が抽出できるという特徴があるが、もし「意図しない変化」が確認されて、今後それを「意図する変化」と位置付けていきたいのであれば、その「意図する変化」が生まれた要因は何か、再現性を持たせていくためには現場の活動をどのように発展させると良いのか、といった改善活動にもつながるであろう。またサポートキットなどを活用して「意図する変化」を把握するための指標を設定できると、その変化を経時的に見ていくこともできるようになる。

[4] MSCファシリテーターの育成

今後全国規模でMSCエピソードを蓄積していくのであれば地域ネットワーク団体や中間支援団体を対象としてMSC評価ファシリテーターの育成を計画的に行っていくことが必要になるであろう。地域ネットワーク団体への評価のキャパシティビルディング支援をおこなうことによって、こども食堂運営者自身が価値をより適切に扱えることができるようになり、こども食堂と関係者（ボランティアや寄付者や企業、自治会など）とのコミュニケーションの円滑化にも貢献するだろう。またMSCファシリテーターは、ワークショップを通じてこども食堂のエピソード抽出支援のみならず、そのエピソードを活用して振り返りや内省支援を行うことで現場の改善にも貢献していける可能性があると考えられる。

8 -3 サポートキットの発展的な展開について

サポートキットについて、2022年度の実施を踏まえると、以下のような方向性で発展していける可能性があると考えます。

[1] 全国のこども食堂から定量化に関心のある食堂を募る

今回、地域ネットワーク介入拠点と立候補拠点でサポートキットのモデル実施を行ったが、サポートキット使用に明確な目的をもって参加した食堂と、地域ネットワーク団体から声をかけられたので参加した食堂の間では、明確に取り組み状況に差が出た。発見編での気づきと価値の再認識が行われ、それらを物語るためのデータは何かを思案し、指標を決め、データを収集する。そして集まったデータを見て、どのように活用するか。これら一連の流れを見せることで、関心を持ち、取り組みたいと考える食堂がある一定それぞれの地域にあると考えられる。本レポートにおいて、その流れを踏んだ食堂の事例を挙げられることから、サポートキットの普及を促していくことができると考える。

[2] 説明と相談の機会を設ける

立候補拠点に対しておこなったサポートの中で、月1回の相談会の場が効果的であった。他の地域の食堂の取り組み状況が知れるとともに、設定した指標や集めているデータについて評価伴走者に相談できる機会は有用であるとともに、指標設定に足踏みをしている食堂が他の食堂の指標を「何のために」「どのようにして」設定したのかを知ることで、先に進むといった相乗効果もある。たとえば半年に1回の指標設定オリエンテーションと、毎月1回の相談の場をオンラインで設定。年に1回、取り組んだこども食堂が集合し、各自の食堂でのデータ収集状況の報告と振り返りをおこない、各食堂の自立度（運営改善ができている、地域の連携団体が増えたなど）を報告することができるのではないだろうか。各食堂が自立的に運営できるようになることは地域ネットワーク団体にとってもむすびえにとっても有益であろう。

[3] 各食堂内での指標設定ワークにファシリテーターを派遣

今回取り組んだ食堂の気づきの中で多かったのは、他の運営者やボランティアに対してどのようにサポートキットに取り組む意義やデータを収集することの意味について、いかに伝えるかが課題となった点である。説明を受けた一部の人間だけが理解しても、実際の食堂開催時に、子どもや地域の参加者に直接触れ合うのは、ボランティアや他の運営スタッフであることが多い。データ収集にあたっては各食堂でのふりかえりの時間の工夫も必要になってくるが、まず指標設定時にファシリテーターを派遣できるような仕組みをつくることも一考であると考えます。

[4] 現場参加型で指標リストを充実させていき、こども食堂の共有財産とする

まとめ部分で述べたように、3年間のひとつの大きな成果としては現場目線で設定された指標一覧が集まったことであると考えます。このようにお上から降ってきた指標ではなく、自分たちが大切にしたい指標を自分たちで考えることができたこと、実際にデータをとってみて、そこから解釈や価値判断をできるようになった

ことは大きな意味があると思う。子ども食堂が全国で広がりを見せていく中で、今後各現場で評価のニーズがより生まれてくるであろう。そこに向けて、現場目線で構築した指標リストを整備すること、それを充実させていく仕組みをつくり、社会の共有財としていくことを提案したい。食堂のタイプごと、5つの花びら+花びらの中心部に対応させたカテゴリ、変化の対象、地域、SDGsゴールなどで検索できたりすると使い勝手があがるであろう。(データベースの例でいうと、インパクト投資分野には、グローバルインパクト投資家ネットワークが提供するIRIS+というインパクト・マネジメントのためのシステムが参考になるかもしれない。) MSCのエピソードには共感が集まるが、現場にとって活用できるのは「指標」である。この「指標」を現場が使いやすくする仕組み、その指標セットを子ども食堂運営者や地域ネットワーク団体が参加型で育てていくための仕組みがあると、子ども食堂の量的拡大と質的深化の両面からの大きな支援になるであろう。

8-4 居場所そのものの価値の考察へ(試論)

本プロジェクトを実施した結果、図23に示すように仮説が更新された。さくらプロジェクト開始時の仮説は、5つのバリューが目的としての価値であり、その価値が創出する源泉として「多世代交流」を位置付けていたが、終了時(現在)の仮説としては5つのバリューが「結果として生まれる価値」であり、多世代交流だけでなく居場所そのものが「意図的な価値/目的的な価値」にもなりえて「意図的に高めていく価値」という整理が関係者にとって納得感が高く実感値に即していることが分かった。

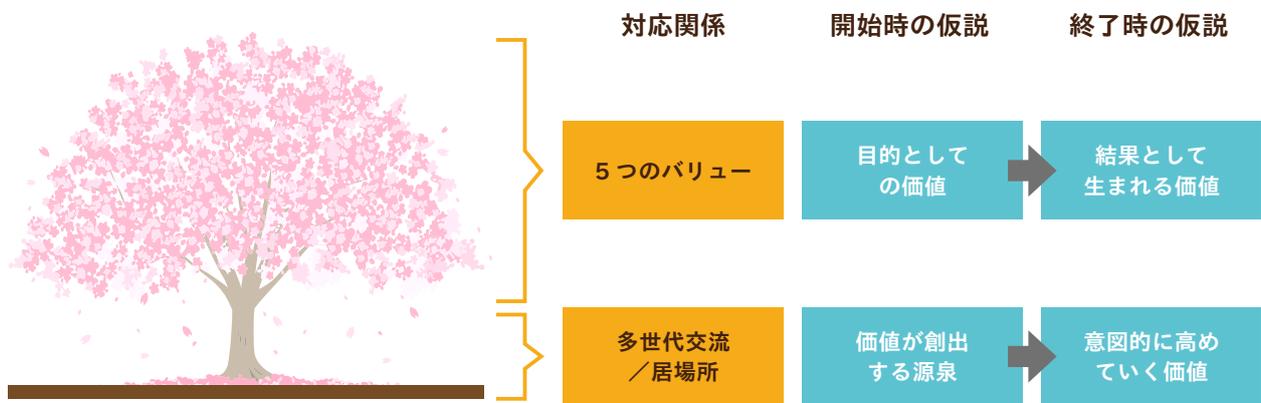


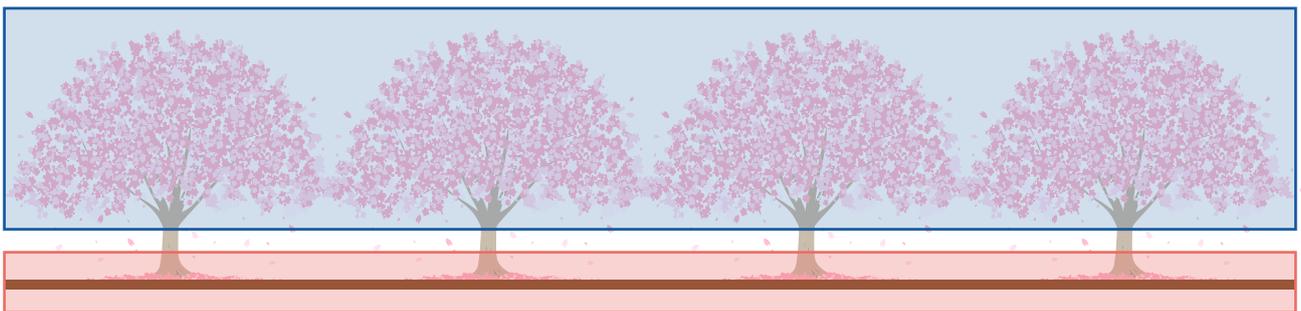
図 23 さくらの木モデルと仮説の対応関係

さくらプロジェクトで開発した評価アプローチとの関係で整理すると、「意図的な価値」を捉えるためにはあらかじめ指標を設定するサポートキットの使用が向いており、「結果としての価値」を捉えるにはMSCツールキット(MSCワークショップ)の使用が向いているだろう。子ども食堂で「結果としての価値」(5つのバリュー)を確認して、今後そこに意図と再現性を持たせたいのであれば、なぜその望ましい変化が生まれたのかを分析して、子ども食堂の活動の中でその変化が生まれるように工夫することが必要であり、それが子ども食堂の活動の改善となる。そして多世代交流の居場所そのものが価値の源泉であるならば、この居場所の質を向上させていくことも、望ましい変化を生み出していく上で欠かせないだろう。

図24に示すように、子ども食堂の活動によって生まれるバリューは地域特性や地域課題と対応すると言えるだろう。そのため子ども食堂の数だけ、多様なバリューが生まれていることになる。これらはサポートキットの指標の多様性やMSCエピソードの多様性にも現れている。このバリューの多様さを踏まえると、子ども食堂の価値の総体としては示せない(示すためには、様々な制約条件をつける必要がある)

地域における課題解決度である「結果としての価値」を見たいのはもちろんであるが、その「結果としての価値」が生まれる根源的な部分(源泉)に着目したくなる。そのためには、価値研究会の議論で明らかになったように、さくらの5つの花びらではなく、中心部(本質的価値/内面的価値)に着目していくことが必要なのではないだろうか。当初の仮説の通り、さくらの花びらの中心部には「多世代交流」があり、これがあるから地域に応じたさくらの5つの花びらの変化が生まれるという整理ができる。ただ「多世代交流」が生まれているだけでなく、価値研究会の議論から見えてきた通り、子ども食堂で子どもが核となるつながりが生まれているか、子ども食堂の懐の深さや接点の持ちやすさがあるかといった「多世代交流」や「居場所」の質に注目していくというように今後推移していくのではないか。だからこそ、子ども食堂の価値を見ていく取り組みを発展させるためには、「結果としての価値」の5つのバリューだけでなく、「結果としての価値」が生まれる根源である子ども食堂という「居場所そのものの質」への着目が必要である。このことは現在において、居場所づくりそのものが地域づくりの重要な手段として捉えられており、政府が孤独孤立重点計画等で掲げている居場所そのものを価値と捉えようとする発想にも通じるだろう。本プロジェクトの実施により、様々な価値が生まれる根源である子ども食堂という「居場所そのものの質」への着目が時代の要請でもあることが読み取れる。これがさくらの木モデルという土壌や木の根の部分に対応するもので地域づくりに普遍的な視点をもたらすものであり、今後はこの方向で「居場所そのものの質」を捉えるための取り組み(評価の仕組みの構築)を進めて、社会実装や啓発を進めていくことが望ましいと考える。

子ども食堂の活動によって生まれるバリューは、地域特性や地域課題と対応する。
そのため子ども食堂の数だけ、多様なバリューが生まれている。



さくらの木(子ども食堂)が育つために必要な土壌の豊かさは共通である。
それが人と人とのつながりが生まれるための仕掛けである「多世代交流」、「居場所」である。

図24 全国の様々な地域に根差す子ども食堂をさくらの木モデルで示したイメージ



付属資料

9 付属資料

[1] サポートキットの紹介

さくらの花びらサポートキットは、あなたが、

- ・私が運営する・手伝うこども食堂は、何を大切にしたい/しているのだろうか？
- ・大切にしたい/していることを中心にした運営ができているのだろうか？

と思ったときに、それをお手伝いするためのツールです。

あなたのこども食堂のタイプがわかり、地域での役割や運営についてのヒントを得られます。

以下の3ステップからなります。



ステップ1:発見

フォームで簡単な質問に答える

最初にこちらのフォームに回答します。<https://forms.gle/SrXrkfYWqvdTqAwV8>



(このURLから、フォームを閲覧はできますが、現在、リアルタイムでのサポート実施は行っておりません)

まず、フォームであなたが運営するこども食堂の活動の特徴をお伺いします。

- ・質問では、あなたがこども食堂を運営する中で日頃、大切に思っていること、気になっていること、こうであって欲しいなど思っていることについて伺います。
- ・所要時間は2-3分程度です。

発見結果を確認

1週間程度で発見結果と推奨チェック項目がメールで届きます。

- ・発見結果には、例えば下記のような、活動で大切にしていることがわかるこども食堂のタイプが書いてあります。

例: **あなたのこども食堂は「地域の多世代で子育てタイプ」**

食事を共にできる場づくりを通して、地域の方たちと一緒にその地域に住むこどもたちや保護者、高齢者の様子を見守る場を作っていきたいあなたのこども食堂は「地域の多世代で子育て」タイプです。

タイプの理解と共有

- あなたのこども食堂のタイプ、つまり「活動で大切にしていること」が確認できたら、そこでツールキットの利用を終わりにしていただいても大丈夫です。
- よろしければ、タイプを関係するみなさんで共有して、「そうだよね!」「そうなのかな?」と話し合う題材にしてみてもいかがでしょうか。
- もし、大切にしていることを中心にした運営ができているかをチェックしたいと思われたら、次に進んでみてください。

ステップ2:準備

運営チェックのための推奨項目を確認

タイプごとの推奨チェック項目には、例えば下記のようなチェックポイントが書いてあります。

例:「地域の多世代で子育てタイプ」の場合

子どもたちの変化をとらえているか

- 挨拶や会話
- 遊ぶ場所、仲間、時間、遊びの種類
- 帰宅前の様子

保護者の変化をとらえているか

- 笑顔
- 愚痴や悩みの呟き

高齢者の変化をとらえているか

- 発言(よかった、嬉しい、長生きしたい、やりがいがあるなど)
- 仕草(表情が和らぐ、笑顔になる、楽しそうなど)

こども食堂に関わる地域の人の変化をとらえているか

- 関わる人の数・関わり方
- 多様性
- 継続性

ステップ3:運営チェック

運営チェックガイドを参考に運営チェック

- 発見結果と推奨チェック項目と一緒にメールに運営チェックガイドのリンクが貼ってあります。
- 運営チェックガイドには、例えば下記のような数字で推奨チェック項目の現状や変化を把握するためのやり方が書いてあります。

例:「地域の多世代で子育てタイプ」の場合

子どもたちの変化

- 挨拶をする子どもの数
- 他の参加者や運営者と会話をする子どもの数
- 男女や年齢混ざり合い、一緒に遊ぶ子どもの数
- 帰りがらないそぶりを見せる子どもの数

保護者の変化

- 笑顔を見せる保護者の数
- 愚痴や悩みをつぶやく保護者の数

高齢者の変化

- 該当の発言(よかった、嬉しい、長生きしたい、やりがいがあるなど)がある高齢者の数
- 該当の仕草(表情がやわらぐ、笑顔になる、楽しそうなど)がある高齢者の数

こども食堂に関わる地域の人の変化

- こども食堂に関わる運営者の数
- こども食堂への関わり方(調理、食材の提供、場所の提供、寄付、広報、その他運営)
- こども食堂の運営者の属性ごとの人数
- こども食堂の運営者の居住地域ごとの人数・こども食堂の運営者の関わる回数
- こども食堂の運営者の関わってからの期間

- 運営チェックガイドの内容は、みなさんがこども食堂の運営者として現状や変化を把握したい、大切にしている価値を中心にした運営をしたいと思った時にサポートするためのものです。
- そのままどこかに提出したりするためにチェックするものではありません。
- ガイドにはチェックのための数字を集計するのに役立つツールも添えてあります。
- あなたのこども食堂の特徴をつかんで、活動をよりよいものにしていくヒントを手に入れたいと思ったら、さくらの花びらサポートキットを使ってみてはいかがでしょうか？

[2] MSC ツールキットの紹介

MSC ツールキット 3つのステップ

ステップ1:こども食堂の現場から「大事にしたい変化のエピソード」を集める

ファシリテーターが、「あなたにとって、こども食堂を運営していて、もっとも嬉しかった変化のエピソードを1つ挙げてください」などと問いかけます。ワークショップ参加者は、それぞれ自分が思う最も重大な変化を紙に書きます。書き終わったら、一人ひとりに発表してもらいましょう。発表がぐるっと一巡したら、ワークショップの参加者の人数分、現場から「大事にしたい変化」の物語が集まっていることとなります。



MSC 動画(むすびえYouTube)より

ステップ2:みんなから出た「もっとも大事にしたい変化のエピソード」の中から「もっともすげーチェンジ」を選ぶ

ファシリテーターが、「この中で、このメンバーとして一番大事にしたい変化の物語は何ですか?」と問いかけます。複数の「大事にしたい変化の物語」の中から話し合いで「一番大事にしたい変化の物語」の物語を一つ選びます。

ステップ2
 みんなから出た
 「もっとも大事にしたい変化のエピソード」の中から
 「もっともすげーチェンジ」を選ぶ



各食堂からエピソードの共有をぐるりと一巡したあとに、投票してもらおう（一人数票もってもらいました）



1人3票とか5票もつ場合は

投票結果です

ワークショップでは みなさんに投票してもらいます

ステップ3:なぜ、その物語が「一番大事にしたい変化の物語」として選ばれたかをみんなで確認する、噛み締める

MSCエピソードへの投票理由を確認して、「一番大事にしたい変化の物語」みんなで噛み締めて味わいましょう。

ステップ3
 なぜその物語が「もっともすげーチェンジ」
 として選ばれたかをみんなで確認する 噛み締める



挙げられたエピソードの例です。
 参加者全員で大事なエピソードをシェアして、「あらためて自分たちがこども食堂を運営する意義」を再確認したり、「こども食堂が生み出す価値」を噛み締め合います。

高校1年生の新リーダーで取材に来てくれた子がいた
 受験勉強などでしばらく来れなかったが
 受験に受かった時に報告に来てくれた
 「しばらく来れていなくてやっと戻ってこれたという感じがします」と言ってくれた
 その言葉がとっても嬉しかった

滋賀県で行われたワークショップでは

こどものスタッフが手伝ってくれて
 大人と一緒に運営する思いになってくれたことが嬉しい
 こどものスタッフは・小学校2年（男の子）・5年（女の子）
 自分の役割だと思って頑張ってくれている
 他の子の刺激にもなっているし
 社会性を育む意味でも良いと思う

滋賀県で行われたワークショップでは

【着想の経緯】 さくらプロジェクト開始時には、こども食堂の運営者とロジックモデルづくりなどを試みた
が、タイプが同じ食堂といえども明確な課題解決や特定の最終ゴールに向けて体系的な活動をおこなっている
わけではなく、うまく収束していかなかった。そこでエピソードベースの評価手法であるMSCを試験的に
実施したところ、食堂運営者たちから多くの「重大な変化の物語」が生まれてきて、それぞれが語るエピソード
に共感が生まれて大いに盛り上がった。そこでMSCの手法をこども食堂の現場、支援する地域ネットワー
ク団体の立場で活用しやすくするために、実施ステップの再整理と解説動画づくりなどを行った。共同開発
者のJess Dartより使用および展開の許可を得て、「概要編」、「実践編」の2本の動画を制作した。



【想定する使用イメージ】 地域ネットワーク単位でのこども食堂参加型のワークショップ、またはこども食堂
内での運営の振り返りやワークショップにて活用いただく想定で、ワークショップ形式としてまとめている。
参考として、2021年度の滋賀県でのワークショップ参加者から、現場でのMSCの有用性や活用アイデア
を挙げてもらった。特に内部関係者のエンパワーメントの側面での活用イメージが多いことがわかるだろう。

- ・スタッフに報告することで、自分たちの食堂の良さや強みの再発見につなげる。
- ・スタッフ、子どもたちとともに、楽しく、仲間作りや周りと味わう。
- ・エピソードを共有しあう場をつくれると良いと思う。
- ・子ども、親、スタッフや参加者、支援している人々と、エピソードをつくり、まとめて、共有したい。
- ・掲示板に、このようなエピソードを生み出すことを目標として掲げる。
- ・エピソードが生まれた事項を大切に、次につなげたい。
- ・みんなで集まることはないので、「エピソード(物語)ノート」を1冊おこうと思う。
- ・こども食堂は、こどもの大切な居場所なんだ。心温まる居場所として、積み上げていこうと思う。
- ・何年経っても、嬉しかったこととして、発信し続けていきたい。
- ・それぞれの言葉を大切につないでいきたい。体現・実行していきたい。

[他の評価手法と比較したときのMSCの特徴]

食堂運営者のMSCワークショップの感想や実感値を踏まえて、他の評価手法(主にプログラム評価)と比較したときのMSCの特徴を整理すると以下の通りまとめられるであろう。

1. 気軽にできる、かつエピソードをしっかりと出せる	小難しい専門性が不要で、現場の方達が内製化しやすい(運営の振り返りとしても活用可能)。普段恥ずかしくて積極的にエピソードを言えない人でも、ワークショップだからこそ、しっかりとエピソードを出せるようになる。
2. エピソードの想起と共感の連鎖によって、参加者がエンパワメントされる	忙しいと忘れてしまいがち。自身の食堂の最も重大な変化のエピソードをあらためて問われて、それを思い出す過程で、これまでの経験を振り返ることになる。ワークショップで参加者全体で共有する際には、違う食堂のエピソードであっても、自分ごとのように強い共感を覚えて、参加者全体があらためてこども食堂の活動の価値や意義を噛み締める機会となる。
3. 本人も想定しえなかった重大な変化を、生き生きと捉えることができる	重大な変化の物語を思い出す過程で、タイムマシーンに乗って過去に戻り、現在まで時間旅行する。その中で、記憶の奥に眠っていた思わぬ大切な変化と出会うことがありうる。眠っていた変化の記憶が生き生きと蘇る。
4. あらためて何を大切にしているか、自らの価値観に気がつくことができる	“SC”を抽出する過程と“M”を選ぶ過程において、価値づけ(価値判断)をおこなうことにより、あらためて自分たちが何を大切にしているかに立ち返ることができる。その過程で、自分たちが大切にしている価値観に気がつくし、価値観が鮮明になってくる。
5. 他者に具体をわかりやすく、かつ印象強く強く伝えることができる	MSCで見出された重大な変化のエピソードは、現場で生まれている変化の具体を語るすることができる。現場を知らない人に、大切な変化を生き生きと理解してもらうことにつながる。印象が強いので波及効果や共感の輪の広がりを期待できる。



滋賀県におけるMSCの対面ワークショップの様子



諏訪圏域におけるMSCのオンラインワークショップの様子

[ツール]

2021年度に、MSCワークショップの学習教材として解説動画2本を制作した(制作協力:株式会社nagi)

まず知ろう 概要編

[【MSC 動画概要編】子ども食堂の現場でどんな価値が生まれているでしょうか_認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ](#)

実際にやってみよう 実践編

[【MSC 動画実践編\(最新\)】子ども食堂の現場でどんな価値が生まれているでしょうか_認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ](#)